東京立正女子短期大学紀要

第 21 号

目 次

Salutation & Complimentary Close	井	П	美登	利	(1)
鼻音の発音に関する日・英の比較研究	中	[尚]	典	子	(33))
格付与に関する一考察	伊	原	睦	子	(47)
短大生の健康意識と運動習慣、食生活の実態に関する研究 (1)	原	田	つ寿貴	子	(57)
青年期女子における性役割構造の分析Ⅲ	Ш	室	宫	子	(109)
あ・い・だ の詩学 ——サミュエル・ベケットの『名づけえぬもの』	山	田	田津	子	(141)
地蔵の田仕事再考 福島県の鼻取り地蔵譚を中心として	紙	谷	威	廣	(170)
日蓮聖人「十一通御書」の考察	堀		教	通	(192	
	西		哲			
《編集後記》					(121)

1993

東京立正女子短期大学

Salutation & Complimentary Close

井 口 美登利

はじめに

Salutation (あるいは Greeting) とは、英文の Letter <u>書信</u>を構成する要素のひとつであって、通常は Body of the Letter 本文を書き始める直前に置く.

訳語としては:

手紙の書出し,

(手紙の書出しの) あいさつ文句,

あいさつの言葉(文書),

(手紙・演説などの前置きとしての)

あいさつの文句,

頭語 (書出しのことば).

勘辞

などが挙げられる.

Complimentary Close (あるいは Complimentary Closing, Closing, Close) も亦, 英文の Letter <u>書信</u>を構成する要素のひとつであり, 通常は Body of the Letter 本文を書き終えた後, Signature 署名の前に加える.

訳語としては:

(手紙の最後の部分で、慣例上署名の直前に用いられる) 結句、

結語(むすびの言葉),

結辞,

などが見られる.

一通の Letter に用いられる Salutation と Complimentary Close には、然るべき組合せがあって、相互に関連・補完して機能するが、Letter の Sender 送り手の側より、Receiver 受け手に対する形式的な"表敬"に止まらず、この Letter における Sender と Receiver との関係を表示する。例えば、Degree of Formality 親近の度合をはじめ、時には Letter Body に述べられる Message についての Sender の立場と姿勢を示す場合もあることを知っておかねばなるまい。

Salutation と Complimentary Close に相当するものは、古くからわが国の書信作法にも存在する。先ずは11世紀の半ば、藤原明衡の著した"雲州消息"、さらには平安季世、中山忠親の"貴嶺問答"の末尾に述べた八項目の書札礼(書信の礼儀作法を述べた Manual)の中には、Salutation に相当する"充書""上所"の種類と用法を示しているが、当時すでに、その用法には変遷のあったことを知る。13世紀末の"弘安礼節"(あるいは"弘安格式""弘安書札礼")には、さらに体系化された諸規定があり、これは専ら公家社会のためのものであるが、後の武家社会に成立した多くの書札礼の典拠となっている。書信の発信者と受信者との身分関係に応じて用いるべき"書止め"(あるいは"書留め"Complimentary Close に相当する)と"上所"の使い分けについて詳述してあることはまことに興味深く、現代における英語圏社会にあっても、Important Personage に書信を呈する場合、Salutationと Complimentary Close の用法には一定の作法と礼式の存在する事実を想起させる。

本稿は先ず、Modern English Letter Writing における Salutation と Complimentary Close の種類とその基本的な用法を体系化して、Bilingual Secretary を目指す本学英米語学科秘書コース学生に対する実践的語学教育の資料とするとともに;How to Address Important Personage におけるその多様な用法を整理しつつ、これと対応すべき、わが国中世および近世に成立した多くの書札礼

に示される"上所"と"書止"の用法との類似性と相違性に関する比較考察を加えることを目的とする。

1 Salutation

1 1 Salutation の種類

Letter Writing において、Body of the Letter の直前に掲げる Salutation には、およそ次の種類がある。

COMMONLY USED FORMS OF SALUTATION

TO ONE PERSON (NAME, GENDER AND COURTESY TITLE PREFERENCE KNOWN)

Dear Mr. Conway: Dear Ms. Feder:
Dear Mrs. Kraft: Dear Miss Smith:

TO ONE PERSON (NAME KNOWN, GENDER UNKNOWN)

Dear Marion Ford: Dear R. S. Dressler:

TO ONE PERSON (NAME UNKNOWN, GENDER KNOWN)

Dear Madam: OR Madam: (more formal)

Dear Sir: OR Sir: (more formal)

TO ONE PERSON (NAME AND GENDER UNKNOWN)

Dear Sir or Madam: OR Sir or Madam: (more formal)

OR Dear Madam or Sir: OR Madam or Sir: (more formal)

TO ONE WOMAN (COURTESY TITLE PREFERENCE UNKNOWN)

Dear Ms. Onstott: OR Dear Annabelle Onstott:

TO TWO OR MORE MEN

Dear Mr. Egger and Mr. Preissl: OR Gentlemen:

OR Dear Messrs, Egger and Preissl:

TO TWO OR MORE WOMEN

Dear Miss Conway and Miss Feder:

OR Dear Misses Conway and Feder:

Dear Ms. Kraft and Ms. Smith:

OR Dear Mses. (OR Mss.) Kraft and Smith:

Dear Mrs. Ford and Mrs. Dressler:

OR Dear Mesdames Ford and Dressler:

Dear Mrs. Onstott, Ms. Egger, and Miss Preissl:

TO A WOMAN AND A MAN

Dear Ms. Feder and Mr. Conway:

Dear Mr. Kraft and Miss Smith:

Dear Mr. and Mrs. Ford:

TO SEVERAL PERSONS

Dear Mr. Conway, Mrs. Kraft, Ms. Feder, Mr. Smith, and Miss Ford:

Dear Friends (Colleagues, Members, or some other suitable collective term):

TO AN ORGANIZATION COMPOSED ENTIRELY OF MEN

Gentlemen:

TO AN ORGANIZATION COMPOSED ENTIRELY OF WOMEN

Mesdames: OR Ladies:

TO AN ORGANIZATION COMPOSED OF MEN AND WOMEN

Gentlemen: OR Ladies and Gentlemen: OR Gentlemen and Ladies: NOTE: For greater formality, some writers use My dear in place of Dear.

上掲の表は William A. Sabin, <u>The Gregg Reference Manual</u>, Fifth Edition, New York: Gregg Division/ McGraw-Hill Book Company, 1977, pp.251, 252. に基づいて作成した.

Personal Letter に用いられる Salutation としては、Formality の度合に応じて、その範囲はさらに広くなる。次表には、Family Name に代えて First Name (時には Nick Name) で呼びかける極めて Intimate な Receiver に対して用いるものも含まれている。

FORMS OF SALUTATION USED IN PERSONAL LETTERS

	To Mr. Robert Smith	To Mrs. Elizabeth Ford	*
Formal	Sir:	Madam:	
	My dear Sir:	My dear Madam:	
	Dear Sir:	Dear Madam:	
	My dear Mr. Smith:	My dear Mrs. Ford:	
	Dear Mr. Smith:	Dear Mrs. Ford:	
	My dear Smith:	My dear Ford:	
	Dear Smith;	Dear Ford:	
	My dear Robert:	My dear Elizabeth:	
1	Dear Robert:	Dear Elizabeth:	
Informal	Dear Bob:	Dear Beth: (Dear Betty:)	

*未婚の女性には Mrs. に代えて Miss を, あるいは既婚未婚に関係なく Ms. を用いる.

この他、特別な役職・地位にある人いわゆる Important Personage に対する Salutation には、多くの Variation があるが、後章に詳述する。

1. 2 Salutation O Capitalization/ Punctuation/ Abbreviation

First Word および Noun と Title は常に Capital で書き始まる。従って Dear Sir: であっても My dear Sir: となり、Right Reverend and dear Sir: のように書くのである。 きわめて Informal な Salutation であっても、My very own Darling、とした Letter を見たことがある。

Salutation の後に加える Punctuation は通常 Colon である. Social Business Correspondence あるいは Informal Personal Letter において、例えば Dear Bob: Dear Betty: のようなきわめて Informal な Salutation を用いる時には、

Colon に代えて Comma を用いてよい.

Open Punctuation Form を用いる Letter にあっては、Salutation および Complimentary Close の後には、なにも Punctuation Mark を加えない。 Letter Writing にはこの他、Standard Punctuation Form と Close Punctuation Form とがあるが、これについては拙稿 "バイリンガル秘書教育におけるビズネス・イングリッシュの体系的指導プログラム(東京立正女子短期大学紀要第17号) p. 17の Forms of Punctuation を参照されたい。

Salutation においては、Title として用いられる Mr., Ms., Mrs., Messrs., および Dr. は Abbreviation のままとするが、その他の Title, 例えば Professor, Father, General, Captain の類はすべて Write-out することになっている。

1 . 3 Salutation

Salutation は本来、その字義のように、書信の本文の直前に掲げて、受信者に対する敬意あるいは親愛の情を示す "あいさつの言葉" であった。直接の面談・会話においてもそうであるように、発信者と受信者との関係に応じて、"あいさつの言葉" には多くの種類があり、その中から、その場に応じて、適切なものを選ばなければならない。 Communication の視点から言うならば、Sender と Receiver の置かれた Situation の中で、Sender 側の持っている Purpose とそのために用意された Message の構成・内容・語調に対応する Salutation (そして、これと組合せるべき相当の Close とともに) を用いるようになった。いわゆる TPO (Time, Place, and Occasion) に適った Salutation の呈示は、Receiver に対し本文に先行して "Sender の立場・態度を予告する" 機能を有するに至ってくる。 Personal Letter における Situation — Formal、Less Formal、Informal の区別はもとより、Business Letter にあっても、Friendly、Crisp、Critical あるいは Accusing であろう Sender の姿勢を、先ずSalutation の段階で告知する場合があるのである。

1. 4 Salutation の用法

Salutation の基本的な用法について、もっとも簡にして要を得ているのは、 Hodges and Whitten, Harbrace College Handbook の Letter に関する記事で あろう:

The Salutation (or greeting) should be consistent with the tone of the letter, the first line of the inside address, and the complimentary close.

John C. Hodges and Mary E. Whitten, Harbrace College Handbook, 6th edition, Harcourt, Brace & World, Inc.: New York, 1967, p.435.

"Salutation は Letter の Tone, Inside Address の初行 (すなわち Receiver あるいは Addressee), および Complimentary Close の三者に対応し、首尾一 售したものでなければならぬ。"

Sender の Receiver に対する関係よりも、先ず Letter の Tone (すなわち Situation と Sender の姿勢) を第一に掲げたところが本筋であると思うからである.

およそ Effective Letter Writing の要諦のひとつに、Consistency がある. これは本来、Letter Body の構成、表現、用語について言われるところであるが、冒頭と末尾に置く Salutation と Complimentary Close を含めての Consistency を強調していることに注目したい。

Formal と Less Formal の別についても、単に儀礼的な敬意を表する Formality もあれば、表面の文言は丁寧であっても、底意はどこまでも Critical ないしは Accusing な Letter もあろうし、さらにまた、世に言う慇懃無礼となる場合も、適切な配慮に欠けた Salutation と Complimentary Close の誤用によって生じ得るものである。その事例については、後に Complimentary Close の用例の項で触れたい。

1. 4. 1 Business Letter O Salutation

ここに言う Business Letter とは、一般に Office から発信される Letter の 総称であるから、Commercial Correspondence を含み、さらに広い範囲の概 念を意味しており、個人が私宅から発信する Personal Letter と対比される。 Practical な Business Letter Writing に限るならば、Salutation の用例は次の ように集約される:

- Addressee が団体ならば、Gentlemen: (その構成員の性別に応じて Ladies: あるいは Ladies and Gentlemen: を用いることもある。)
- (2) Addressee が個人であり、これに Formal な Letter を書くときは、性別に応じて

Dear Sir: あるいは

Dear Madam:

(3) Addressee が個人であり、これに Informal な Letter を書くときは、性 別に応じて

Dear Mr. Ford:

Dear Miss Ford: Dear Mrs. Ford: Dear Ms. Ford:

"My dear" Category, すなわち My dear Mr. Ford: ほかの使用については、なによりもその Formality が Dear Sir: と Dear Mr. Ford: の中間にあること、すなわち、Dear Sir: よりは Less Formal であることを承知しなければならぬし、儀礼的な敬意を示すというよりも、Sender の Receiver に対する姿勢を示す場合が多いのである。いわば、"おりいってお願いのすじがございます..."と改まったものの言い方を予告する用例もあれば、Collection Letter の Last Step である Ultimatum に掲げるときには、Notice、Inquiry、Appeal と手順を踏んでも、なおはかばかしい応答のない相手に対して Critical あるいは Accusing な強い姿勢を示す、ひらきなおった表現ともなるのである。

"My dear" Category Salutation の誤用は、なにもわが国の学生に限らない、 英語を母国語とする人たちの間においても少くないようである。そうでなけれ ば、学生用の参考書に一項を掲げて、わざわざ解説を加える必要はあるまい。

Dear and My dear. One inconsistency of English usage is the fact that, although My dear would seem to be a more intimate form of address than Dear, just the opposite is the case. You address a friend, Dear Jim, but an acquaintance, My dear Mr. Jones....

Afred Stuart Meyer, <u>Letters for All Occasion</u>, New York: Barnes & Noble, Inc., p.10.

1. 4. 2 Personal Letter O Salutation

Personal Letter とは個人が私宅から発信する Letter の総称であり、Office から発信する Business Letter と対比する。Personal Letter は Receiver の種類と Formlity の程度によって、その Arrangement を異にする三つの分野に大別される。

(1) Personal Business Letter は Receiver が Office であり、Printed Letterhead の代わりに Sender の Address を Date Line の上に加えるほかは、ほとんど一般の Business Letter に類似する。Date Line の次に Inside Address が続き、時には Attention Line をはさんで、Salutation の順となり、次には、これまた時により Subject Line をはさんで Letter Body に入る。Complimentary Close の後には Signature と Typed Name が続くが、Business Letter における Typed Organization Name(あるいは Firm Name)と Official Title は、もとよりその要がない。Identification Initials も無用であるが、Enclosure Notation と CC Direction は必要に応じ加えてよく、Post Script を書きそえることもあろう。

Salutation の種類とその用法は、ほとんど Business Letter とかわるところ

がない、僅かに、きわめて親密な関係にある個人に対しては、Personal な内容 とはいえない. Businesslike な用向きを内容とする Letter をその Office Address に宛る場合などに、例えば通常の Dear Mr. Ford: よりも、Dear Robert: あるいは Dear Bob: のように、Surname ではなく、First Name あるいはその Diminutive, 時には Nick Name や Pet Name で呼びかけた方がふさわしいこ とがあろう. こうした Salutation に加える Punctuation としては、Colon は重 かろうから Comma に代えて良いが、このいわば破格の用法には、充分に TPO を考慮して、"場ちがい"にならぬよう注意しなければなるまい.

(2) Formal Personal Letter は Receiver も個人であり、その私宅に宛てる が、Formal に呼びかけるべき関係と状況にある相手に対して、Personal な内 容を述べる Letter をいう. その Arrangement は Personal Business Letter とは 大きく異なる. Sender's Address と Date Line の後に Salutation, Letter Body と続き、Attention Line や Subject Line の入ることはない. Complimentary Close, Signature, Typed Name の次に Inside Address を置く. 時により Post Script を加えることはあるが、それ以外の Parts (Identification Initials, Enclosure Notation, CC Notation の類) は用いない. Formal Personal Letter にお ける Salutation の種類と用法は、Business Letter の場合と同様であるが、 Addressee は個人に限定されるから、次のようになる:

Sir:

Madam:

My dear Sir:

My dear Madam:

Dear Sir:

Dear Madam:

My dear Mr. Smith: My dear Mrs. Smith:

Dear Mr. Smith:

Dear Mrs. Smith:

このうち Sir: (Madam:) および My dear Sir: (My dear Madam:) は、きわめ て Formal な場合、例えば Government Officials, Members of the Armed Services, あるいは Dignitaries に宛てる Letter に限ればよかろうし、Situation に

応じる使い分けの目安としては

Dear Sir: (Dear Madam:) は"初めまして"

My dear Mr. Smith: (My dear Mrs. Smith:) (#

"おり入って、お話 (お願い) がございます"

Dear Mr. Smith: (Dear Mrs. Smith:) "その節はどうも..." と考えれば大渦なかろう。

(3) Informal Personal Letter は Informal に呼びかけるべき関係と状況にある Receiver に宛てる Letter であり、その Parts は少く、従って Arrangement も簡単となる. Date, Salutation, Letter Body, Complimentary Closing, Signature の順に進み、その他の Parts は、Post Script を除き加わることはない.

Salutation も当然 Formal なものを用いることはなく、Receiver との親近の 度合いに応じて、選択の範囲はかなり広くなる。次に男性に対する Addressee の場合を示すが、女性の場合もこれに準じる:

Dear Mr. Smith:

My dear Robert:

Dear Robert:

Dear Bob:

Bob dear:

Dearest Bob:

Bob dearest:

Bob, dearest:

あるいはまた、日常話しかけているように、時には Nick Name を用いて、 例えば、

Dear Slim: Dear Chubby:

もあり得るし

Dear Aunt Dottie: Dear Uncle Davy:

Dear Aunt Hanni and Uncle Toni:

といった表現も、よく見るところである。さらには人名を省いた、

Dear Daughter: Dear Son:

My Darling: My very own Darling:

Sweetheart!

と続く、First Name で呼びかける Salutation では、Colon に代えて Comma を附けることが多いし、時には Exclamation Mark がふさわしい場合もある. こうした多様な Salutation の TPO に応じた用法については、いちいちに解説を加える必要はあるまい。

2. Complimentary Close

Personal in Tone

2. 1 Complimentary Close の種類

Letter Writing において、Body of the Letter の直後に加える Complimentary Close には、およそ次の種類がある:

Sincerely,	Yours truly,		
Cordially,	Yours very truly,		
Sincerely yours,	Very truly yours,		

Cordially yours, Very sincerely yours,

Respectfully yours, Yours respectfully, Faithfully yours,

More Formal in Tone

Entirely Informal

Affectionately,

Affectionately yours,

Yours,

Always yours,

Yours always,

Yours devotedly,

Yours gratefully,

Yours ever.

Ever yours,

Forever yours,

As ever.

Yours, as ever,

Your loving son (daughter, nephew, etc.),

Your loving grandmother (grandfather),

Your affectionate Godfather,

Love.

With love.

Much love.

With much love,

Lots of love.

All my love,

With all my love,

With all my sympathy,

Always your friend,

Always your good friend,

Best wishes,

With best wishes,

Best regards,

Warmest regards,

Sincerest regards,

See you in April (May, June, etc.),

2. 2 Complimentary Close O Capitalization/ Punctuation

Complimentary Close の First Word は常に Capital で書き出すが、Second Word 以下はすべて Small Letter のままとする。但し前掲の表にふくまれる Complimentary Close の中にある Godfather や April のように、常に Capitalize する Word に対してはこの限りでない。

Complimentary Close は終りに Comma を加える. Salutation の場合と同じく, Open Punctuation Form を用いる Letter では, No Punctuation とするのは当然である.

2. 3 Complimentary Close の機能

Complimentary Close は本来、その字義のように、書信の本文の末尾を結んで、受信者に対する敬意あるいは親愛の情を示す Sentence あるいは Clause の独立したものである。その名残りは今日もなお、高位高官に宛てた Extremely Formal な Letter の Complimentary Close に見ることが出来る:

I have the honor to remain, Most respectfully yours,

これは U. S. President に宛てた Business Letter の 2 行書き Complimentary Close であり、また

I have the honor to remain,

Your Majesty's most humble and devoted subject,

は The Queen に宛てる Letter のそれである.

今日の Complimentary Close は Salutation と首尾あい応じて、書信の Salu-

tation, Sender 側の Purpose あるいは Letter の Tone を伝える機能, ないしは Formality の Grade を示す役割を持っていることは, さきに "Salutation の機能"の項に述べた通りである。

2. 4 Complimentary Close の用法

2. 4. 1 Business Letter O Complimentary Close

Practical な Business Letter Writing に限るならば、Complimentary Close の 用例は次のように集約される:

(1) SalutationがGentlemen: Dear Sir:あるいはDear Madam:ならば、 Truly Category すなわち、

Truly yours,

Yours truly,

Very truly yours,

Yours very truly,

を用いればよい。

(2) Salutation が Dear Mr. Ford: (Dear Mrs. Ford:, etc.) ならば、Sincerely あるいは Cordially Category のうちで Very を含まぬもの、すなわち、

Sincerely yours,

Yours sincerely,

Cordially yours.

Yours cordially,

を用いるのが通常であるが、Letter の Tone が Friendly というよりは、 Crisp あるいは Critical な場合には Truly Category と組合わせて、その姿 勢を確認するものである.

Truly yours,

Yours truly,
Very truly yours,
Yours very truly.

(3) Salutation が My dear Mr. Ford: (My dear Mrs. Ford:, etc.) ならば, Letter の Tone により Truly Category と Sincerely Category を使い分ける. すなわち、Friendly であれば.

Sincerely yours,

Yours sincerely,

を用い、Critical あるいは Accusing な場合には、

Truly yours,

Yours truly,

Very truly yours,

Yours very truly,

として、Sender の姿勢を示す結びとする。さきに "Salutation の用法"で述べた Collection Letter の Ultimatum あたりは、当然 Very truly yours、とするのである。また複数あるいは団体を Addressee とする Business Letter の Salutation はほとんど一律に Gentlemen: (Ladies) に限定されるから、Sender と Receiver との関係、Letter の Tone を示す役割は、もっぱら Complimentary Close が担うことになる。すなわち、通常の Truly Category と組合わせる代りに、Sincerely Category のものを用いれば、Friendly Tone となり;Letter Body の Wording と Style が Colloquial ならば、Cordially Category の Closing で結ぶのが相性がよい。こうした指導は初心者には容易に理解し難いであろうが、すくなくとも知識としては示しておきたいものである。

2. 4. 2 Personal Letter O Complimentary Closing

(1) Personal Business Letter の Definition と Arrangement については、

"1. 4. 2 Personal Letter の Salutation" の項において述べたので、 重複を避け、省略する。

Salutation との組み合せについては、Business Letter の場合と同様である。すなわち、

Gentlemen:

Dear Sir: (Dear Madam:)

に対しては、一般に Truly Category を対応させるが、TPO に応じ、Sincerely Category あるいは Cordially Category を選ぶべき場合のあることは前に述べた通りである。

My dear Mr. Ford: (My dear Mrs. Ford:, etc.)

Dear Mr. Ford: (Dear Mrs. Ford:, etc.)

との組み合せには、Sincerely Category を中心に、Situation と Letter の Toneあるいは Wording や Style に応じて、より重い Truly Category か,より軽い Cordially Category を用いる。選択に迷う時には、この Salutation に対する Standard である Sincerely Category のままでよい。なまじ Addresseeに充分に敬意を表したつもりで、不用意に Very truly yours、なんてやろうものなら、Message の内容によっては、"いったい何をトンガッテいるんだい?"という意外な反応を与え、丁寧どころか却って失礼な結果に終ることもあるのを知らねばならない。

- (2) Formal Personal Letter の Definition と Arrangement については,
 - "1. 1. 2 Personal Letter の Salutation" との重複を避け、省略する. Salutation との組み合わせ、あるいは一貫性については、Personal Business Letter の場合と同じであって、

Gentlemen: Dear Sir: Dear Madam: に対しては、

Truly Category を標準とするが、Sincerely Category さらには Cordially

Category を用いることにより Less Formal あるいは More Friendly な姿勢を示すことが出来る.

My dear Mr. Ford: (My dear Mrs. Ford:, etc.)

Dear Mr. Ford: (Dear Miss Ford:, etc.)

に対しては.

Sincerely Category を標準とし、時により Truly Category あるいは Cordially Category を組み合わせて Sender の姿勢を明らかにすることの出来ることは、すでに繰り返し述べてきた通りである。

Truly・Sincerely・Cordially 以外の Category については、Sincerely と はぼ守備範囲の重なる Faithfully Category(英国では今日でも使用される ことが多い)までは別として、Specific な Salutation、例えば Respectfully や Devotedly の類の使用には慎重でなければならない。

Generally あるいは Commonly に使用されることの少ない Salutation は 不用意に扱うときは、単なる"場違い"では相済まぬ"間違い"さらに大きな"無礼"となる危険を覚悟すべきである。

(3) Informal Personal Letter ともなれば、その性格上、きわめて多様の Salutation と Complimentary Close が存在しており、従って無数の組み合わせが考えられるが、Sender と Receiver の関係、Formality の度合い、Message の内容と Wording が明らかであれば、その選択はむしろ容易であろう。Complimentary Close としての約束事として、First Word(2行書きとする場合は、さらに2行目の最初の Word)を Capitalize するが、それ以外の Word は Small Letter のままとすること;Open Punctuation Style の Letter を除き、終りに Comma(時により Exclamation Mark あるいは Question Mark)を加えることは守らねばならない。

Letter Body の末尾に、例えば、

Best wishes,

See you in August,

Welcome to Tokyo!

のような Informal Closing Phrase が出来るときは、これは変り型の Complimentary Close と考えて、通常の Complimentary Close Position に置いてもよく; Letter Body の終りにこの Informal な Complimentary Close を続け、Regular な Complimentary Close を定位置に添えるか; Letter Body の Last Line から 1 行あけて、この Closing Phrase を Separate Line に書き、さらにRegular な Complimentary Close を定位置に置く、以上三種の方法のいずれかを採ればよいのである。

3. Important Personage に対する Salutation と Complimentary Close

周知のように、今日の英語では"冠詞"および"代名詞"がきわめて簡略化されており、一人称代名詞は単数の I と複数の we、二人称代名詞は複数ともに you に集約されている。他のヨーロッパ語では、しかく単純ではない。例えば英語ともっとも親近関係にあるドイツ語の場合、二人称代名詞には、単数に 敬称の Sie と愛称の du があり、書き言葉としては du よりも Formal な Du が 加わる。さらに複数にも敬称の Sie (これは単複同形)と親称の ihr と準親称の ihr があって、合計 5 語を 6 様に使い分けねばならない。きわめて ihr Informal な英語の ihr Complimentary ihr Close のひとつ ihr Yours に対応するドイツ語の ihr Briefgru ihr は従って、

Ihr Dein dein Euer euer の別があるが、発信者が女性の場合には、語尾を変化して、

Ihre Deine deine Euere euere とするから、合計十種に分れる。なおドイツ語の Briefgruβ には Punctuation を加えない。

わが国では中世以降,書信の形式・作法については身分の地位に対応する厳密な規定があった.公卿社会から武家社会,さらには町人社会に至っても,いわゆる士農工商を初めとする重層化した階級制度さらには長幼、件別も加わっ

て、書信の礼法を一層複雑化する。そのため、いわゆる往来ものをはじめ、各種の書札礼が Letter Writing Manual として重用された。もとより今日の英文書信とは、その構成要素、順序配列に異同があるが、Salutation と Complimentary Close に相当するものが早くから二重に存在し、機能していたのである。

"群書類従"巻第百世八〜第百四十五消息部には平安季世, すなわち11世紀の半ばに成立した藤原明衡の"雲州消息"をはじめ"貴瀬問答"各種の往来物(十二月往来,新十二月往来,異制庭訓往来,雜事往来,尺素往来,积氏往来,山密往来),さらには"書札礼","書札作法抄","細川家書礼抄","大館常興書札抄"などが収めてあり,こうしたManualを通じてわが国中世より近世に至る書信の作法を窺うことが出来る。

書信の構成はおよそ.

差出書

充書(あてがき)あるいは充所(あてどころ)

事実書あるいは用件書

日付

の四者より成る.

"差出書"は発信者の役職名と氏名であるが、その下に小さく書き加えた "下付(したづけ)が、第一の Complimentary Close に相当する。すなわち、 これによって受信者に対する敬意を表わすのであるが、発信者と受信者との主 として身分・地位上の関係をさらには TPO に応じて、

上 奉 行 状 講文 敬白 などを使い分ける.

"充書"は受信者の役職名・氏名を書くが、その上部に書き加えた"上所(じょうしょ)"が"下付"に対応する第一の Salutation に相当する、受信者の身分・地位に応じて、

進上 謹々上 謹上 拝上 拝進

などを使い分ける. "充書"にはこの他, その下部右脇に加える "脇付(わきづけ)"がある. 今日の書信に見られる

御中 侍史 机下 玉案下 の類は、その後身である。

"事実書"は書信の本文であり、これはさらに

書出し 中書き 書留め(書止め)

の三部より成るが、この"書出し"が第二の Salutation であり、"書留め"が Complimentary Close であることは、容易に理解されよう.

"書出し"には

御状拝見、わざと言上致し候 急度申入候

のような文章表現が後には固定して,

拝啓 護啓 拝呈 急啓 復啓 拝啓 冠省 前略 となって現在に至っている.

"書留め"はこれに反して、早くから固定していたことは、

恐惶謹言 恐々謹言 誠恐謹言 頓首々々謹言 謹言 頓首 恐惶敬白 執達如件 如件 敬白 敬具 不宣 不備 不具 不一 再拝

などの文言が"書札礼"ほかに見えていることでも窺える。("書札礼"では、 漢文体のこともあって、"書留め"を"奥札書"と称している。)

"書札礼"には、当然ながら、書信作成に関する各種の礼法と規定が詳述してある。例えば第一の Salutation に相当する"上所"については、一項を設けて

上所事

准上謹々上、 恐礼也、 謹上、

等同之礼. 謹奉. 処凡卑之詞也.

と示しているが如きである.

時には"書札作法抄"のように、世人の誤用を批判しながら、

一 誠恐 誠惶 頓首 某言上ナド書事,皆公家,書札也.武家ヤウニテハ 不可書. 将亦恐惶敬白 恐々敬白ト云. 敬白ノ字在家ョリ出家ノ方へ書也. 又出家ト出家トハ申ニ不及. 出家ノ人ノ方ョリ在家, 人ヲウヤマヘバトテ, 敬白ト書 支尤僻支也. 能々覚悟スベキ也.

と戒めている. 当時の僧侶には、こうした無教養な者が多かったのであろうか.

こうした Manual の中で、編者が書き加えた Comment は、時により、ほほえましいものがある。もとより、これも度が過ぎては目障りになろうけれども、次のような例はいかがであろうか。 Complimentary Close の用法を示した記事の中で発見したところである:

In the Complimentary Close, do not capitalize any word except the first. "Yours very respectfully" is correct-- not "Yours Very Respectfully," not "Yours very Respectfully"; "Yours respectfully" -- not "Yours Respectfully."

Never use the word respectively for respectfully. Perhaps in your case the warning is entirely unnecessary, but the mistake is so frequently made, and so serious, when it is made, that it should be mentioned here.

Alfred Stuart Myers, <u>Letters for All Occasions</u>, New York: Barnes & Noble, Inc., 1964, p.35.

"大館常興書札抄"には、守備範囲の広い"上所"(第一の Salutation) である "謹上"を受信者に応じて Calligraphically に揩書と行・草書に書き分ける 方法のあることを示しているのは興味深い。

一 謹上と書事,まへにも申ごとく上中下へわたりての書やうなり.いかにもしんに書へ上手へ遺分也. ちと草に書は同輩への分也.いかにもさうに書い下手へ遺分也.

"上所"と"書止め"の組み合わせについては、発信者と受信者との身分・ 地位に応じて厳密な規定があった。例えば"書札礼"には、まず発信者と受信 者の身分をその官職と位階に応じて十数種に分類している.

大臣 (従一位,正一位,従二位)

 大納言
 (正三位)

 中納言
 (従三位)

参議 (従三位)

蔵人頭 (従三位)

四位殿上人 (正四位, 従四位)

五位殿上人 (正五位, 従五位)

地下四位諸大夫 (正四位, 従四位)

地下五位諸大夫 (正五位, 従五位)

五位下北面 (正五位, 従五位)

六位下北面 (正六位, 従六位)

医道・陰明道 (五位に準じる)

僧正 (従三位に準じる)

法印・法務・僧都 (四位に準じる)

法眼・律師 (五位に準じる)

凡僧 (六位に準じる)

例えば、従三位中納言某より、上位の大臣に呈する書信は"書止め"に、 言上如件。 某恐惶謹言。

として "上所" は用いない、それは "書止め" の中に "言上" という, きわめて Formal な敬辞が含まれているからである。

この発信者が、位階を同じくする参議某に宛てる書信では、"書止め"に、 恐々離言

として, さらに"上所"には,

謹上

と添えることになっている.

こうした規定は単なる空文ではなく、当時実際に厳守されていたことは、稀

に誤用はあるものの、現存する中世・近世の書信に照して明らかである.

現代の英語圏社会において、今日もなお、いわゆる Important Personage に対する書信には、その官職・地位に応じて使い分けるべき Salutation と Complimentary Close の厳格な規定の残っていることは、意外であるとともに、興味深い、次に掲げる表は The President あるいは The Queen に始まる米・英の Import Personage に用うべき Salutation と Complimentary Close とを整理したものであるが、これはまさに、"米英版書札礼"の感を覚えるところである.

Table 1 Salutation for Addressing Important Personage

Personage	Personal Letters	Business Letters
The President	Dear Mr. President:	Sir:
The Vice-President	Dear Mr. Vice President:	Sir:
The Chief Justice, Supreme Court	Dear Mr. Chief Justice;	Sir:
Cabinet Members	Dear Mr. Secretary:	Sir:
	or Madam Secretary:	or Madam:
Attorney General	Dear Mr. Attorney General:	Sir:
United States Senator	Dear Senator Ford:	°Sir: or
		Madam:
The Speaker of the House of Representatives	Dear Mr. Speaker:	Sir:
Member of the United States House of Representatives	Dear Mr. Ford: or Dear Mrs., Miss, or Ms. Ford:	Sir: or Madam:
Ambassador of the United States	Dear Mr. Ambassador: or Dear Madam Ambassador:	Sir: or Madam:
Ambassador of a Foreign Country	Dear Mr. Ambassador: or Dear Madam Ambassador:	Excellency:
Consul of the United States	Dear Mr. Ford: or Dear Mrs., Miss, or Ms. Ford:	Sir: or Madam:
Governor of a State	Dear Governor Ford;	Sir: or Madam:

Personage Personal Letters Business Letters Sir. Mayor Dear Mayor Ford: or Madam: Dear Sir: Federal Justice Dear Judge Ford: or Dear Madam: Dear Mr. Ford: Dear Sir: Lawyer or Dear Mrs. Miss. Dear Madam: or Ms. Ford: The Pope Your Holiness: Your Holiness: Most Holy Father: Dear Cardinal Ford: Cardinal: Your Eminence: Archbishop. Dear Archbishop Ford: Your Excellency: Roman Catholic Most reverend Sir: Most Revrend Bishop, Roman Dear Bishop Ford: Catholic Sir. Abbbot Dear Father Abbot: Right Reverend Abbot: Mosignor Dear Monsignor Ford: Right Reverend Monsignor: Priest Dear Father Ford: Reverend Father: Dear Sister: Members of Dear Sister Agness: Religious Order or Dear Brother Adams: Dear Brother: Bishop, Protestant Dear Bishop Ford: Right Reverend Episcopal Sir: Clergyman, Dear Mr. Ford: Dear Sir Protestant Clergyman. Dear Pastor Ford: Dear Sir: Lutheran Rabbi Dear Rabbi Ford: Dear Sir: University Dear Professor Ford: Dear Sir Professor or or Dear Dr. Ford: Dear Madam: or Dear Mrs./Miss/Ms. Ford: Physician/Dentist Dear Dr. Ford: Dear Sir:

or Dear Madam:

Table 2 Complimentary Close for Addressing Important Personage

Personage	Business Letters	Personal Letters
The President	Respectfully yours, or Sincerely yours,	I have the honor to remain, Most respectfully yours,
The Vice-President	Sincerely yours,	Very truly yours, or Respectfully yourss,
The Chief Justice, Supreme Court	Sincerely yours,	Very truly yours, or Respectfully yours,
Cabinet Members	Sincerely yours,	Very truly yours.
Attorney General	Sincerely yours,	Very truly yours.
United States Senator	Sincerely yours,	Very truly yours.
The Speaker of the House of Representatives	Sincerely yours,	Very truly yours.
Members of the United States House of Representatives	Sincerely yours,	Very truly yours.
Ambassador of the United States	Sincerely yours,	Very truly yours.
Ambassador of a Foreign Country	Sincerely yours,	Very truly yours.
Consul of the United States	Sincerely yours,	Very truly yours.
Governor of a State	Sincerely yours,	Very truly yours.
Mayor	Sincerely yours,	Very truly yours.
Federal Justice	Sincerely yours,	Very truly yours.
Lawyer	Sincerely yours,	Very truly yours.
The Pope	Your most humble servant,	Your Holiness" most humble servant,

Personage	Business Letters	Personal Letters
Cardinal	Your humble servant,	I have the honor to remain, Your Eminence's humble servant.
Archbishop, Roman Catholic	Your obedient servant,	I have the honor to remain, Your obedient servant,
Bishop, Roman Catholic	Respectully yours, or Faithfully yours,	I have the honor to remain, Your obedient servant,
Abbot	Respectfully yours, or Faithfully yours,	I have the honor to remain, Your obedient servant,
Monsignor	Respectfully yours, or Faithfully yours,	I remain, Right Reverend Monsignor, Yours faithfully,
Priest	Faithfully yours,	I remain, reverend Father, Yours faithfully,
Members of Religious Order	Faithfully yours,	Respectfully yours,
Bishop, Protestant Episcopal	Sincerely yours,	Respectfully yours,
Clergyman, Protestant	Sincerely yours,	Very truly yours,
Clergyman, Lutheran	Sincerely yours,	Very truly yours,
Rabbi	Sincerely yours,	Very truly yours,
University Professor	Sincerely yours, or Sincerely,	Very truly yours,
Physician/Dentist	Sincerely yours, or Sincerely,	Very truly yours,

Table 1, 2 11

Elizabeth L. Post, <u>The New Emily Post's Etiquette</u>, New York; Funk & Wagnalls, 1975.

William A. Sabin, <u>The Gregg Reference Manual</u>, New York: Gregg Division/ McGraw-Hill Book Company, 1977.

ほかを参照して作成した.

この表に見るように、米国の場合では今日、Respectfully および Faithfully Category の Complimentary Close は、その対象をほとんど聖職者に限っていることを知れば、世俗人に対しては、まずはその使用を控えた方がよいのである。

前に引用した"書札作法抄"における"敬白"の用法と、まさにその軌を一にするわけであって、"在家ョリ出家/方へ書也"であることは、まことに興味深い。

続いて英国における Important Personage に対する Salutation と Complimentary Close 用法の一部を整理すれば、およそ次の通りとなる。

Table 3 Salutation for Addressing Important Personage

Official Letters Social Letters Personage The Queen Madam. Dear and Honoured Madam. May it please your Majesty. Members of the Sir. Dear Sir. Royal Family or or Madam. Dear Madam. Duke My Lord Duke. My dear Duke. or My dear Lord Duke, Will your Grace, &c. Duchess Madam, My dear Duchess. Will your Grace kindly allow, &c, or

Table 4 Complimentary Close for Addressing Important Personage

Will your Grace permit, &c.

Personage	Official Letters	Social Letters
The Queen	I have the honour to remain, Your Majesty's most humble and devoted servant.	
Members of the Royal Family	I remain, Sir (or Madam), Your Royal Highness's most obedient servant.	I remain, Sir (or Madam), Yours faithfully,
Duke	I have the honour to be, Your Grace's most obedient servant.	I am Your Grace, Yours faithfully, or Yours truly, or Yours sincerely.
Duchess	I have the honour to remain, Your Grace's obedient servant.	I am Your Grace, Yours faithfully, or Yours truly, or Yours sincerely.

以下, Marquess, Marchioness, Earl, Countess, Viscount, Viscountess, Baron, Baroness, Baronet, Wife of Baronet, Knight, Wife of Knight, Esquire, Wife of Esquire と続くから、なかなか容易でない。さらに、THE CLERGY, THE ARMY, THE NAVY, THE AIR FORCE, THE BAR, THE GOVERN-MENT の順に進んで行く、全体として、Sentence あるいは Phrase 仕立ての長々しい Salutation と Complimentary Close が多く、Faithfully を Truly と同列あるいは上位に置いて用いる例も少くない。

Table 3 は主として、The Complete Guide to Letter-Writing, London & New York: Frederick Warme & Co., Ltd., 1965 を参照して作成した。

Army, Navy, Air Force の Officer に対する Salutation は、 Official Letter では一様に Sir あるいは Dear Sir (今日では Madam, Dear Madam もあろう.) に集約されるが、これが Social Letter となれば、上級将校と下級将校では差別があって、例えば陸軍の場合。

Dear General Green,

Dear Colonel White,

Dear Major Black,

Dear Captain Brown,

に対して, Lieutenant Ford に宛てる Salutation には,

Dear Mr. (Miss or Mrs. or Ms.) Robinson,

としなければならず, ご丁寧にも Footnote で

This commissioned rank has no military title,

と断ってあるのが目についた。さらに爵位を有する場合もあって、一層複雑化 しているのであるが、こうした事例はまたわが国の"書札礼"にも見えている。

位階は従二位であっても、別に役職を持っていない公卿を"散二位"と呼んで、その序列は参議とならび、従三位の中納言の次、同じく従三位の蔵人頭の上に置くというが如きである。

〈おわりに〉

Salutation と Complimentary Close の機能と用法は、時とともに集約化され、簡単となった、NOMA (National Office Management Association) の Simplified Letter に至っては Salutation と Complimentary Close の両者を、思い切りよく廃止して、Letter Body の前には All capitalize した Subject Line を、後には同じく All Caps の Organization Name を置くようにした。Business Letter の分野では、これでも充分に通用するかも知れないが、NOMA Letter の普及度は、未だそれほど高くない。Personal あるいは Social Letter の世界では、Salutation と Complimentary Close は、これからも存在理由があろうし、あらしめたいものである。これはまた、日本語の書信についても同様であると考えている。

BIBLIOGRAPHY

- Aurner, Robert R., <u>Effective Business English</u>, Cincinnati: South-Western Publishing Co., 1949.
- Hodges, John C. and Mary E. Whitten, <u>Harbrace College Handbook</u>, New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1967.
- Hulbert, English Skill Builder Reference Manual, Cincinnati: South-Western Publishing Co., 1992.
- Mager, N. H. and S. K., <u>The Complete Letter Writer</u>, New York: Pocket Books, 1969.
- Myers, Alfred Stuart, <u>Letters for All Occasions</u>, New York: Barnes & Noble, Inc., 1964.

- Poe, Roy W., <u>Handbook of Business Letters</u>, New York: McGraw-Hill Book Company, 1983.
- Post, Elizabeth L., <u>The New Emily Post's Etiquette</u>, New York: Funk & Wagnalls, 1975.
- Sabin, William A., The Gregg Reference Manual, Fifth Edition, New York: Gregg Division/ McGraw-Hill Book Company, 1977.
- <u>The Complete Guide to Letter-Writing, London & New York: Frederick</u>
 Warne & Co., Ltd., 1965.
- Van Huss, <u>Basic Letter and Memo Writing</u>, Cincinnati: South-Western Publishing Co., 1992.
- 塙 保己一(編),『新校群書類従』,第六巻消息部,巻百丗八~巻第百四十五 所収:『雲州消息』,『貴嶺問答』『十二月往来』,『異制庭訓往来』,『書 札礼』,『書札作法抄』,『細川家書札抄』,『大館常興書札抄』,東京:内 外書籍,1931(復刻).

小松茂美,『手紙の歴史』,東京:岩波書店,1977.

高橋洋二 (編), 『手紙』, 別冊太陽No.46, 東京:平凡社, 1984.

辻村敏樹、『敬語の史的研究』、東京:東京堂出版、1968.

鼻音の発音に関する日・英語の比較研究

息の流出の仕方との関連について

中岡典子

0. はじめに

日本人学習者の英語の発音には、母国語からの干渉が強力に働いている。しかし、これは単に話す場面、聞き取りの場面をふやせば解決するというような問題ではない。学習者の多くは、自分が日本語の音声の枠組みを崩す事なく英語の発音をしようとしていることに無自覚である。練習量をふやすだけでは干渉を取り除くことにはならない。

この干渉問題については、"破裂音の発音に関する日・英語の比較研究:息の流出の仕方のちがい"で、破裂音の比較研究を進める中ですでに論じた。¹⁾ 本論文では、同じ観点に立ち、日英語の比較研究の一環として、鼻音を取り上げる。英語の鼻音の発音は他の発音に比べてそれほど難しいものとは思われてはいない。しかし、実際には聞き取り、発音の両者においてかなりのトラブルを引き起こしている。またトラブルを引き起こすまではいたっていなくても、違和感のある発音になっている場合がある。

鼻音における干渉の実態を調べ、日英語の比較の中で、それぞれの言語の特徴と、干渉を引き起こしている原因を追及する。原因を明らかにすることができるならば、干渉問題を解決する道はおのずと開かれるだろう。

1. 日本人学習者の鼻音の発音の問題点

次の 1) ~ 4) の単語、語句、文を日本人学習者が発音すると、誤解は生じないにしても、英語を母国語とする者にとってはかなり違和感のある発音として聞こえがちである。しかも、学習者本人は自分では正確に発音しているつも

りなので、そのことになかなか気がつかない。問題となっているのは下線部の 中の鼻音の発音である。

1)	[t n]	[d n]	bu <u>tton</u>	certain	ea <u>ten</u>	frighten	shorten
			hi <u>dden</u>	wi <u>den</u>	gol <u>den</u>	su <u>dden</u> ly	forbi <u>dden</u>
2)	[n s]		pri <u>nce</u>	lice <u>nse</u>	dance	suspe <u>nse</u>	sentence
3)	[0]	a)	sing	hang	bri <u>ng</u>	long	thing
		b)	si <u>ng</u> ing	hanging	bringing	singer	hanger
		c)	kings	songs	rings	length	strength
4)	[n]#	[[v]]	a <u>n i</u> ceman	a <u>n</u>	<u>a</u> im	been a	live
		[w]	a <u>n i</u> ceman ni <u>ne o</u> 'cloc	ck cap	<u>n i</u> magine	ca <u>n u</u> se	•
		([y])	i <u>n w</u> ine	in	your bag	mai <u>n v</u>	<u>/</u> ork
			ten years				
			There was no sign of rain when I left my house.				
			The cheese was eaten away by rats.				
			Women and weather are not to be trusted.				

2. 日本語の鼻音と英語の鼻音の相違点

1) 音連鎖にかかる制約の相違

英語の鼻音と日本語の鼻音とでは、第1に音韻上働く制約の違いが大きい。 英語の音節構造は多種多様で、子音連結が多様に一音節内でおきる。また音節 内に限らず、音節境界を越え、単語の境界を越えてどこにでも現れるという特 徴がある。従って、鼻音の音連鎖に対する制約は特にない。

一方、日本語の音節構造は単純で、音連鎖に制約が多くかかるという特徴がある。日本語の音節は時間単位のモーラ (mora) である。全ての子音と母音に対しそれによる制約が働く。従って、鼻音にもその制約が働く。モーラには、母音、子音+母音、半母音+母音、子音+半母音+母音、撥音、促音の6種類がある。鼻音は普通の子音として必ず母音あるいは半母音の前に現れて1音節を構成する。したがって、普通の子音として働いている場合には、撥音をのぞいて他の子音の前後にくることも語尾に現れることもない。促音(Q)と撥

音(N)の2つだけは、子音単独で1音節を構成する。この撥音は鼻音でできている。撥音はこのように単独で音節を構成するので、特殊な鼻音として "syllabic nasal"とも呼ばれる。 語中、語尾にはくるが語頭にくることはなく、 撥音が連続することも、促音と隣り合わせになることもない。

2) 継続鼻音と非継続鼻音

鼻音は口腔内に閉鎖があるかどうかによって、継続鼻音か非継続鼻音かの2種類に分けられる。非継続鼻音の場合は唇、歯茎、軟口蓋などの位置で口腔内の息の流れを唇、舌を使って止め、息を鼻から出して発音し、次の音に続くときそれぞれの位置で止められていた息が急に口から流れ出る。継続鼻音の場合、口腔内は閉鎖されず、息は鼻腔だけでなく口からも流れ出ており、次の音の息の流れとつながっている。²⁰

英語には継続鼻音はない。一方日本語には継続鼻音と非継続鼻音の両方がある。 "千円"と "千年"を発音して、その時の舌の位置を比較すると、 "千円"の場合の "千"の撥音「ん」の鼻音が継続鼻音であることがわかる。また "千円"と発音中に鼻をつまんでみれば、その鼻音が消えないということで口からも息が流れている鼻音であることが確認できる。ちなみに、継続鼻音を母国語にもたない英語話者には、この "千円"が発音しにくく、彼らの発音は "せんねん" あるいは "せねん"と聞こえ誤解が生じやすい。"

3) 継続鼻音と非継続鼻音の音響上の特徴

鼻音の種類によって、反共鳴は異なった周波数に現われる。反共鳴とは鼻音に特有に現れる音響上の特徴である。鼻腔と口腔が連結して声道が分岐することで、ある周波数の音が選択的に吸収され、その部分の成分がうすく弱まる。反共鳴の周波数は、鼻音を発音するときの口腔内の体積に関係するので、[m]と[n]では、[m]の周波数の方がやや低く700~800へルツ、[n]は1000へルツである。しかし[ŋ]には口腔の共鳴室がないので、反共鳴はおきない。継続鼻音の場合、前後の母音を変えるとそれに伴って反共鳴の現れる周波数はさまざまに変化する。前後の母音の口腔の形と体積の変化にしたがって、

継続鼻音を発音するときの口腔の形と体積が変化するからであり、このことは スペクトログラムによって確認されている。**

継続鼻音のスペクトログラムは、前後の音が変われば同音とは思えぬほど多様に変化する。それにもかかわらず非継続鼻音と混同することなく同一の鼻音として聞き分けられるのは、前後の音との連続性という音響上の特徴があるからである。「千円」の場合、鼻音の部分で前母音のフォルマントが多少変化しながらなだらかに後続母音のフォルマントに連続している。それに対し、「千年」の場合、非継続鼻音 [n] のスペクトログラムには前後の母音のフォルマントとの間に断層的な切れ目が確認できる。5

音響上、継続鼻音が前母音の口腔の形を引き継ぐ鼻音であることが確認されたので、前母音の鼻母音として $\left[egin{array}{c} oldsymbol{v} \end{array}
ight]$ 表記すると、他の鼻音との違いを学習者に印象づけることができる。

4) 鼻音の分布の相違

	非継続鼻音					継続鼻音
	両唇音	歯 音	歯茎音	歯茎硬口蓋音	軟口蓋音	
日本語	m	n		ň	ŋ	有
英 語	m		n		Ð	無

英語には継続鼻音はない。また非継続鼻音の [m] [0] の調音点は日本語と同じであるが、英語の [n] は日本語と違って歯茎にある。また日本語では [n] の異音として [n] がある。

また非継続鼻音の場合、調音点がどこにあるかを素性の違いであらわせば、 以下のようになる。

	英 語			日 本 語			
	m	n	ŋ	m	n	ň	ŋ
anterior	+	+	_	+	+	-	-
coronal	-	+	-	-	+	+	-

5) 鼻音の同化の相違

英語の鼻音の調音点は後続子音の調音占に同化する。

[m]	[n]	[0]
ten men	ten students	ten girls
i <u>m</u> possible	i <u>n</u> dependent	i <u>n</u> consistent
u <u>n</u> balance	u <u>n</u> lucky	u <u>n</u> clear

この後続音への同化は次の規則でまとめられる。この規則は英語に限らず言語に一般的にみられるものである。

英語の鼻音の同化
$$[+\text{nasal}] \rightarrow \begin{bmatrix} \alpha \text{ coronal} \\ \beta \text{ anterior} \end{bmatrix} / _ \begin{bmatrix} \alpha \text{ coronal} \\ \beta \text{ anterior} \end{bmatrix}$$

一方日本語では、普通の子音としての鼻音には母音が続くだけで、音節境界を越えても後ろに子音は続かない。鼻音の後ろに子音が続くのは撥音(N)の場合だけである。この撥音の場合にのみ鼻音は後続音に同化するが、その同化は英語より複雑である。

撥音は後続音の影響を受け、後続音が口腔内に閉鎖を持つ [t] [g] などの場合は [-continuant] の素性をもつ非継続鼻音になる。後続音が閉鎖を持たない母音、半母音、摩擦音などの場合には [+continuant] の素性をもつ継続鼻音になる。非継続鼻音となった場合の撥音は、後続子音の調音点の素性に同化し [m] [n] [ň] [0] になる。以下の例で「干」の撥音「ん」の調音点の違いを参照してほしい。

非継続鼻音: 千枚 [semmai] 千頭 [sento:] 千兆 [seňtʃo:] 千回 [seŋkai |

継続鼻音の場合は後続音の[+continuant] 以外の属性にも同化する。また前母音にも同化し、前母音の鼻母音化ともなっている。言い換えれば、継続鼻音は

前母音から後続音への連続的移行の過程における強い鼻音化である。前母音の 鼻母音化を強調して、簡略化して記述すると以下のようになる。

これらを踏まえると、日本語の撥音(N)の同化は2つの規則にまとめられる。®

日本語の鼻音の同化 N →
$$\begin{bmatrix} \alpha \text{ coronal} \\ \beta \text{ anterior} \\ -\text{ continuant} \end{bmatrix} / \underline{\qquad} \begin{bmatrix} \alpha \text{ coronal} \\ \beta \text{ anterior} \\ -\text{ continuant} \end{bmatrix}$$

$$N \rightarrow \begin{bmatrix} V_1 \\ +\text{nasal} \end{bmatrix} / V_1 \underline{\qquad} [+\text{continuant}]$$

3. 連結部における鼻音の発音のし方の違い

日本人学習者の英語の鼻音の発音で問題になったものは、いずれも鼻音+子音の連結、語境界を間にはさむ鼻音と母音、あるいは鼻音と半母音の連結である。これらの音連結の聞こえの違いの原因を、日英語の鼻音の発音の過程を比較する中で検討する。

1) [t n] [d n] について

この場合、英語では [t] [d] の破裂音は聞こえない。一方、日本人学習者の英語の発音の場合、 [d] [t] の破裂音がはっきり聞き取れるか、あるいは破裂音の後に余分な母音が聞きとれることが多い。この違いは息の解放のしかたに原因がある。

英語の母国語話者の発音では、<u>破裂音+鼻音</u>の子音連結の場合 [t] [d] の破裂音は息を口から解放せず、舌はそのままの位置において鼻音 [n] につなぎ、息は鼻から解放する。したがって破裂音に特有な息の破裂は聞こえず、

[t n] [d n] は1つの音のように聞こえる。

日本人学習者が英語音の [t n] [d n] を発音しようとする場合、 [t] [d] の破裂音で歯茎に舌をおいて息をとめるが、 [n] の発音の前に舌を歯茎から離し、口から息を解放したのち [n] の発音につなぐ。あるいは[t a] [d a] というように母音を間に入れることで、一度息を口から解放した後で鼻音 [n] を発音する。

2) [ns] について

この場合、英語と日本語では聞こえの上で微妙な違いが聞き取れる。しかし、 日本人の場合、指摘されても聞こえの違いを認識することは少ないようである。 英語話者の場合はどうなのだろうか。多少なまった発音程度にしか意識するこ とはないのかもしれないが、英語話者の発音ならば、prince も prints も聞こえ は同じになる。日本人学習者の場合は2つを区別して発音し、当然聞こえも異 なってくる。?

この違いは日本人が継続鼻音を発音しているためにおきている。日本語の撥音は摩擦音の前で、継続鼻音となる。したがって、日本人学習者が英語の鼻音を発音する場合も [s] の前で、継続鼻音を無意識のうちに発音する傾向がある。英語の [n] は非継続鼻音であり、音響上違う特質をもっている鼻音なので、聞き取りの上で違和感が残る。

3) ng について

英語では <u>ng</u> 部分を発音するにあたって、[g] の破裂音が聞こえない場合もあれば、次の場合のように聞こえる場合もある。

d) congress finger longest single language

語末のng (sing/hang/bring/long) は [0] と発音され、 [0] の後に [g] の音 は現れない。動詞に接尾語 - er あるいは - ingがついた場合 (singing/hanging/bringing) は、語中でも [g] は現れない。例えば動詞に - er がついた singer では [9] の音は現れないが、形容詞に - er がついた longer

では [g] が現れる。語中の g では普通、上記の d)の例のように [gg] と発音され [g] が現れる。しかし、語中であるが [g] が現れない場合 (kings/songs/length) もある。

日本人の英語学習者の場合、 \underline{n} \underline{g} のすべての場合に $[\mathfrak{g}]$ の後ろに $[\mathfrak{g}]$ の破裂音が聞こえる。 したがって上記の \underline{d}) の発音にはなんら問題は起きていない。 \underline{c} \underline{n} \underline{g} の発音において、どのような違いが $\underline{2}$ つの言語の間にあるのだろうか。

英語の場合<u>ng</u>が語末にくると、口は閉じられ息は鼻から流出する。舌はその位置においたままで、口から息を解放することはない。*** その後に、更に<u>ing</u>が続いているのが singing の場合である。この場合の後の母音[i]は特殊な母音で、聞こえも普通の母音とは違う。口は開いているものの口からの息の流出はなく、その後に鼻音が続いている。このことは両唇を閉じ、鼻をつまんで口と鼻からの息の流れを止めても、喉の奥の声帯部分でこの特殊な母音が聞こえることで確認できる。従って singing のngは2つ共[1]の発音の後に口からの息の開放はない。

語中でも [g] が現れないのは、 \underline{ng} の後ろに摩擦子音が続いている場合である。 [D] で口からの流出が止められた息は、摩擦音となって口腔内のせばめから気流をともなって流れ出る。つまり、口から息が破裂的に解放されることはない。 \underline{d})では \underline{ng} のあとに流音、母音、半母音が続いている。この場合、口にためられていた息は後続音に続くときに一度に破裂的に解放され、 [g] の音が聞き取れる。以上をまとめると、英語では \underline{ng} の発音で [p] の後に [g] の破裂音が聞き取れるか否かは、後続音に続くときに口からの破裂的な息の解放があるかどうかによる。

次に日本語の場合の $\underline{\mathbf{n}}$ $\underline{\mathbf{g}}$ の特徴について考えてみる。日本語の [0] は撥音 (\mathbf{N}) が後に $[\mathbf{k}]$ $[\mathbf{g}]$ を従えたときに現れる鼻音である。これに関しては非継続鼻音の同化規則が英語と同じように働くので、特に指導する必要はない。しかし、日本語の場合は音節構造上の制約が働くので、音連結の種類は限られてくる。撥音に続く $[\mathbf{k}]$ $[\mathbf{g}]$ の子音の後にはかならず母音が続く。このため日本語の \mathbf{n} \mathbf{g} で止められていた息はその後必ず破裂的

に口から流出して、母音につながれ「g]の音が現れる。

したがって日本人には、日本語には存在しない息の流出のしかた、すなわち、語末のng、ng+ingそしてng+摩擦音の場合に、息を口から破裂的に解放しないで流出するしかたがわからない。そこで、日本語の単一な息の流出のしかたを英語にそのまま適用させてしまう。その結果、どんな場合でもngがあれば[0]の後で息を口から破裂的に解放して[g]を発音するのである。

4) 語末が [n] で、語境界 (#) をはさんで母音で始まる語 (an iceman/been alive) が続くとき、英語では [n] と母音が連結されて一語のように発音される。しかし、日本人の発音はそうなりにくい。

英語には非継続鼻音しかない。後末の[n]は語境界で息継ぎをしない。普通の速度の発音であるなら、同じ句の中で単語の境界にポーズを置いて発音することは不自然であるからだ。非継続鼻音[n]は、舌を歯茎につけて口腔内に息をためているが、語境界で息を解放せず、次の単語の母音に続くとき舌を離して破裂的に息を流出する。

日本語では語末にくる鼻音は撥音しかない。撥音は後に母音が続くとき継続 鼻音となる。したがって、英語を発音するときも、日本人は英語の非継続鼻音 [n]を母音の前では無意識の内に継続鼻音で発音してしまう傾向がある。ほ とんどの日本人は継続鼻音と非継続鼻音の区別があるという認識すら全くない ので、自分ではあくまで [n]を発音していると思っている。したがって個別 に学習して覚えても、応用する力とはならないのが普通である。

例えば an # orange で非継続鼻音 [n] と母音の連結の発音の仕方を覚えても、 ten # oranges, a rotten # orange, a fallen # orange でその発音を応用することはなく、やはり継続鼻音で発音してしまうという傾向が強い。 また、 an # iceman と a # nice man 及び an # aim と a # name を区別するには、 an iceman と a aim で [n] と母音を連結してはいけないと思い、ポーズを入れるか、継続鼻音で発音する傾向がある。

半母音 [j] あるいは [w] が続くときも、日本人は [n] の代わりに継続 鼻音を発音する。したがって、意味上のトラブルは起きないが音声に違和感が 残る。また、日本人は単語や語句だけを発音する時は、ボーズをいれてゆっく り区切って発音するため、それが本来耳障りな発音かどうかということが、 英語話者に気づかれないこともある。しかし、英語の文章を日本人が普通の速 度で読み上げると、このことがはっきりする。

4. 音連結における鼻音の息の流出の相違

母 音

これまでの議論を、息の流出の仕方の違いという観点にたってまとめる。各音について息の流出の違いが一見してわかるように、次のような図式を便宜上用いる。必ずしも十分な図式とはいえないが、口腔内が閉鎖されているのか、息を口から解放しているのか、せばめから気流をともなって息を流出しているのか、鼻腔から息が流出しているのかということの日英語の相違が比較しやすくなる。

口腔にどこも妨げられず息が流出する。

破裂音	(1)	口腔のどこかが閉鎖されていて、息がとめ られ、その後破裂的に息が口から流出する。	─ <
	(2)	口腔のどこがが閉鎖されているが、とめら れた息は解放されることはない。	
摩擦音		口腔内のせばめから気流をともなった息が 流出する	
流音		[1] の場合、舌を歯茎にあて完全な閉鎖を作るが、舌の両側の空気の通り道は開かれていて息は流れている。 [r] の場合、舌はどこにも接触しておらず、せばめもつくらないが、舌の形が息の流れを妨げている。しかし空気の通り道は開かれていて、息は流れている。	~~ →

非継続鼻音 口腔内は閉鎖されているが、鼻腔から息が 流出している。



継続鼻音

鼻腔から息が流出しているが、口腔内に閉鎖はなく、前母音と同じ形をしていて、息は口からも流出している。



特殊なきこ 口は開いているものの、口からの息の流出 えの母音 はない。しかし喉の奥の声帯部分で、この

音が聞こえる。

0

日本語と英語の息の流出の違いを図式を使ってまとめると、以下のようになる。

英語話者の息の流れ

日本語話者の息の流れ

[tn] / [dn]

例 botton





[ns]

例 prince



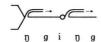
ng[D]

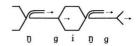
a)語末で 例 sing





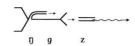
b) の場合 例 singing



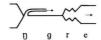


c) 摩擦音の前で 例 kings





d) 側音, 母音, 半母音の前で (日本語と英語は同じ) 例 congress





例 single



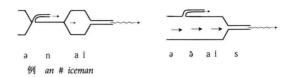


例 hanger





[n] # Vowel



5. ま と め

日本人の英語の鼻音の発音における母国語からの干渉を解決するには、次の 3点の認識と、音連結にあたっての息の流出のしかたの習熟訓練が必要であ る。

- 1) 日本語には継続鼻音と非継続鼻音があるが、英語には非継続鼻音しかない。日本語では母音、半母音、摩擦音の前で継続鼻音を使うので、英語を発音するときもそうしてしまう傾向がある。
- 2) 英語の破裂音には息を解放する発音のしかたと解放しない発音 のしかたがある。後続音が摩擦音、閉鎖音、非継続鼻音、そし て語尾の場合、破裂音は口腔内に閉鎖を作るだけで息を破裂的 に解放しない。日本語には息を解放する破裂音しかないので、 英語でも後続音の種類にかかわらず息を破裂的に解放させる傾 向がある。
- 3) 破裂音+非継続鼻音、非継続鼻音+摩擦音、語尾にあらわれる 非継続鼻音+破裂音、非継続鼻音+破裂音+摩擦音、非継続鼻 音#母音(半母音)の音連結における息の流出のしかたは、日 本語にはないものである。

注)

- 1) 中岡典子(1992), p58~80参照
- 2) この鼻音の存在を、音響上の音声記録を用いて最初に実証したのは兼弘正雄である。 彼はカイモグラフを用いて実証した。

- 3) これについては英語話者で日本語を学習している人の撥音「ん」の発音をスペクトログラムで分析し確認している。村木正武・中岡典子(1990) "撥音と促音"参照。
- 4) 服部四郎 (1956) 参照、大塚高信監修 (1982), p748~749参照
- 5) 前後の母音を a, i, u, e, o と変化させて継続鼻音の在り方の変化 をスペクトログラムで実証した。また後ろが半母音の場合、摩擦音の場合に ついても調べてある。村木正武・中岡典子(1990)参照
- 6) 同上 p143~146, p.156~157
- 7) 同上 p.153~156
- 8) 日本語でも/N/の異音として語末では [p] の発音をする方言がある。しかし、 それはあくまで [g] をともなわない場合の発音でしかない。

参考文献

今井邦彦 (1980) "音声学的比較"p.7~68 「日英語比較講座 第 1 巻 音声と形態1、大修館書店

太田 朗 (1959) 「米語音素論」, 研究社

大塚高信 (1966) 「米会話発音教本」, 南雲堂

大塚高信·中島文雄監修 (1982) 「新英語学辞典」, 研究社

兼弘正雄 (1936) 「日英両国語発音差異の実験的研究」, 研究社

清水克正 (1983) 「音声の調音と知覚」, 篠崎書林

城生佰太郎 (1977) "4章 現代日本語の音韻",橋本万太郎編 『日本語の音韻』, 岩波書店

杉藤美代子 (1989) "音節か拍か - 長音・撥音・促音-", 杉藤美代子編「講座 日本語と日本語教育 第2巻 日本語の音声・音韻 (上)」, 明治書院

中岡典子 (1992) "破裂音の発音に関する日・英語の比較研究:息の流出の 仕方の違い"、「東京立正女子短期大学紀要」第20号、

服部四郎・山本議吾・藤村靖 (1956) "母音の鼻音化と鼻音",「小林理学研究所報告」 6巻4号

村木正武・中岡典子 (1990) "撥音と促音",杉藤美代子編 『講座 日本語と日本語教育第3巻日本語の音声・音韻(下)』,明治書院

三浦種敏監修 (1979) 「新版 聴覚と音声」,電子通信学会

あ・い・だの詩学

―― サミュエル・ベケットの『名づけえぬもの』

山田 田津子

1 動詞は主語を救えるか?

け金に払戻しはあるのだろうか? がだれであるかもわからない。そうであれば、どうやっておれの物語であることを証明するのか?、果たしてこの賭 少しも自明でないからである。語り手は、「おれ」がだれであるのかわからない。当然のことながら、語っているの に見える。だがそうではない。というのは、通常、われわれが自明であるとしてすましてしまっていることが、実は 『名づけえぬもの』は、語り手がおれの物語の生成を賭して独白しつづける小説である。この賭けはすこぶる簡単

「言葉に問わずして沈黙に問え」と言っても同じである。「沈黙雷のごとし」とはいえ、そのざわめきや轟きは決して てニーチェは、「意識に問わずして肉体に問え」と言ったが、たとえ肉体に問うたとしても何も答えてくれはしない。 おれが生成する一瞬を志向して夥しい言葉が吐かれることになるこの小説は、言葉の旅であらざるをえない。かつ

どどこにも仕掛けられていない。どこからもデウス・エキス・マキナ(機械じかけの神)は降りてこない。したがっ 転も用意されていない。すなわち、不要である、まさしくそのことにおいて必要である、といったどんでんがえしな をはかろうとする精神には決してなしえないことである。 ることでしかない。だがこれをなしうるのは、ただ凄まじい明視力のみである。ごまかしの予定調和を案出して脱出 て、この言葉の旅は、きわめて困難な、いうならば、隠れ家もなければ岩陰とてない場所に留まりつつ彷徨しつづけ きて生き抜いた末に開かれてくる荒野である。ここで言われている「無用な」には、後に述べるように、いかなる反 とベケットは言う。この冷徹な認識は、言葉を対象化して眺めたものでも、俯瞰したものでもない。言葉の地平を生 「言葉はいずれも沈黙と無にくっついた無用なしみのようなものである」、しかし、「われわれには言葉しかない」

るだけ遠くで過ごすかわりに、遠くなかった。たぶんこんな具合に始まったんだろう。おまえは単に、それとも理 **うのは、問い、とか、仮説、そう称しておけ。続けていくんだ、どんどん続けるんだ、そういうのはどんどんと称** か 由もなく、休んでいるんだぐらいに思っているんだろ、時期がくれば動けばいいやって、そしておまえはすぐにわ でただじっとしていた、内ってどこだ、外へ出ていくかわりに、昔のように、外へ出かけていって、昼と夜をでき しておけ、そういうのは続けると称しておけ。こんなことになるかもしらんある日、おっ出てきたぞ、ある日、 っちゃうんだおまえ自身が萎え果て二度となんにもできないって。それがどうやって起ったかなんてかまうもん いまどこに? いまだれが? いまいつ? 問いっこなし。おれ、おれと言っておけ。わかりっこなし。こうい

のかもしれないな。だけどおれはなんにもしなかったぜ。おれはしゃべっているようだ、それはおれじゃない、 か。それ、それと言っておけ、何だかわからんけど。ことによるとおれはとうとうあっさり例の事に屈しちまった それはおれのことじゃない。……おれの状況で、どうやって進んでいくのか?」ただずばりアポリア

お

口を突いて出るやいなや、あるいは早かれ遅かれ、無効化されるような肯定と否定でいくか?

ているが何のことやらわからない。判断を差し控えるなんて無知以外にありうるんだろうか?(わからない。 たれているんだ。少しでも先にいく、少しでも先を続けるまえに述べたてておかなくちゃ、おれはアポリアと言っ 的に言って。ほかの方便だってあるにちがいない。そうでなければ望みは全く絶たれてしまう。だが望みは全く絶

でいくか?

実についてしゃべれればだがね、しゃべれないことをしゃべらなくちゃならないだろうし、……それでもおれはし うやって、鳥のように、そいつらみんなに例外なくウンコをひっかけてやるか。事実はどうやら、 ゃべらなくちゃならない。決して黙らないぞ。決して。 やううんに関してはちがうんだ、そいつらはおれがやってくうちにおれのところに戻ってくるだろう、そしたらど おれの状況で事

ケットの目論見とも覚悟ともいえるものがここに隠されているからである。一体どのような? 六千行にもとどくとばかりに、途切れることなく続く語りは右のように始まっている。この冒頭部分が重要なのは、

この語り手の目的は、すでに述べたように、おれの物語をしゃべることである。すなわち、

おれ

はおれである、

とができる。黙ることができる。語り手が沈黙へと至ることができるのは、一重におれの生成にかかっている、と言 言いきることである。そのとき語り手はおれのなかで黙したまま蠢めいているものを黙らせ、ついに語りを終えるこ

けがない。アポリアと言ってみたところでケリのつく問題ではあるまい。語り手は、さしあたっての手がかりとして、 法が残されているのであろうか? 自己同一の達成に至るどのような方法が残されていると言うのであろうか? おれ」という任意の一点を取る。しかし未だ恣意的な一点を、もしもおれの物語で充満させることができれば、語 場所から詰めていこうとしても、 まず語っているのが誰であるかを囲いこまなければならない。そのような語り手にどのような囲いこみの方 内がどこなのかわからない。当然のことながら、外がどこなのかわかるわ

ってよい。ところが問題なのは、その方法である。「おれはしゃべっているようだ」が、「それはおれじゃない」。と

り手ははじめて、おれはおれである、と言うことができ、ついに黙ることができるのだが……。 われわれは通常、右の語り手とは違って、主語が自明であるかのように考えている。その場合でさえ自分の顔を直

二千五百年余り、 曲の導入部分に匹敵するような衝撃を与えずにはおかない所以もここにある。 といったものが秘められているのではないか。右に引用した冒頭部分がわれわれに、あのヴェートーヴェン第五交響 にありうる」のか?と徹底して根源的な問いを発している。おそらくここにこそ、ベケットの目論見、 やるか」と言うように、早晩それらに対して無効を宣言することになるらしい。さらには、 肯定に至る否定の検証に乗りだして行く。というかそのつもりになる。まず、「おれが何でないか」、を言うことがで 語り手は、 接には見ることはできない。鏡に映して見るほかないように、主語は自体的に在るのではなく、媒介されて到来する。 その後に「何であるか」を言うことができるというわけだ。しかしながら、「例外なくウンコをひっかけて 他に良い方法が見つからないまま、このやってくる主語の媒介装置として、肯定と否定、言い替えるなら、 西欧のなかに脈々と生きつづけ、とりわけ、近代を堅固に仕立て上げてきた当のものを瓦解させず なぜならその目論見は、 判断停止など「無知以外 ギリシャ以来

におかないからである。

主語を決定する、と考えられていた場所をである。なぜなら、まさしくこの空間(=時間)こそが、西欧近代を拵え 「〜である」、「〜でない」が、少なくとも有効であると考えられていた場所を検証しておく必要があろう。 ところで私は、ベケットの言葉の旅へと分け入るまえに、少しばかり迂路を取って、肯定と否定、 言い替えるなら、 動詞が

てきたのみならず、モダニズム構想力の根幹を支えてきた当の場所だからである。そしてなによりも、ベケットが

「無効化」せずにはおかない、と言うのだから。

周知のとおり、語り手に死を刻印したのはマラルメである。

に取って代りながら。 はっきりと認知され得る呼吸作用に取って代りながら、或いは又、文章を熱烈且つ個人的にみちびこうとする行為 ける灯影の虚像の一条の連鎖のように、相互間の反射反映によって点火される。古来の抒情詩の息づかいにおける 突によって動員される語群というものに譲るのである。そして語群は、あたかも宝石を連ねたあの玉飾りの上にお 純粋著作は、詩人の語り手としての消滅を必然の結果として齎らす。詩人は主導権を語群に、相互の不等性の衝 (松室三郎訳「詩の危機」

思い込みであったり、またそのたれ流しであったりする。マラルメはこれを「危機」として受け止め、且つ、超克し たとえば「力強い感情の自発的流露」(ワーズワース)であるような抒情詩は、時として詩人のきわめて恣意的な

ようとして語り手の死を宣告したのである。そして、「事物の現実に対して、交換的にしか関係を持っていない」よ

うな語りのなかに、いわゆる「純粋詩」が立ち上るのを見たのである。すなわち、「事物に対して一つの仄めかしを ないしは、 或る何らかの観念がそれを全体の中にその一部として組み入れるであろう事物の特質を分離抽

出する」(傍点筆者)

語りのなかに。

であるが、にもかかわらず、そこから湧出する観念が前者を包含する。否定された直接性は、仄めかし しかしここで、われわれが見ておかなければならないのは、マラルメにあっては死が単なる犬死ではないというこ 再び回収される。「〜でない」において、「〜である」が産まれるのである。それゆえ、マラルメによって詩 語り手の死は、言葉が事物や世界に「交換的に」関わることによって完遂される。「交換的に」とは、事 もはやそれらのいかなる痕跡も見出せないような言葉、たとえば、紙幣や振動数に置き換えられること (=迂路)

近代的知の完成者、ヘーゲルである。「記号は見知らぬ人の魂を移し入れて保存しているようなピラミッドである」 同じように、記号をあるいは記号作用としての表象をピラミッドにみたて、そこに「再生産的構想力」を読んだのは それでありたまえ」。こう呼びかけるマラルメがテキストを墓にみたてたとしても少しも不思議はな

が生成すると信じられた場所では、死としての否定性がもっとも有効な仕事をしていると言わねばなるまい。

(『エンチュクロペディ』四五八節)と、彼は言う。石で造られたあの巨大な四角錐は、 今なお、 乾い

去っている。ピラミッドはかれらの永遠の生を表象しているが、まさしくかれらの死において他ならない。「自己自 うに上っている回廊、その先の暗い花崗岩の石室に安置されている王や女王の棺 ――かれらは「現にありながら消え」

石灰石の斜面から地中深い夜闇へと下りている坑道、

あるいは途中から迷路のよ

永遠を歌い上げているかに見える。

身の外面性」(=石)、すなわち、 自分ではない、他なるもの、のなかで自分であることを成就する。 この外化

五七

エノ

ての否定性が大きく関わっている。 時間をも刻印するに至る。ピラミッドの表象 (representation) が、再現前 (re-presentation) を遂行するのに、死とし 化)により、「~でない」において「~である」が産出される。現し身ではないことにおいて過去が現にあるような

ーゲルはまた次のように述べている。 このように否定性が有効に働く記号作用が、「おれはおれである」という自己同一性を成就するにいたる行程

自己自身が生成するものであり、自らの終わりを自らの目的として前提し、始まりとし、それが実現され終わりに することにほかならないのであって、本源的な統一そのもの、つまり直接的な統一そのものではない。 対立を更に否定する。真理とは、このように自己を回復する相等性もしくは他在において自己自身へと復帰 なものを二つに引きはなす、つまり対立させて二重なものとする。この二重作用が二つのものの無関心なちがいと 際に現実であるような存在である。実体は主観(体)としては純粋で単純な否定性である。であるからこそ、単純

実体は、自己自身を措定する運動、自己が他者となることを自己自身と媒介するはたらきである限りでのみ、実

対している「おれではない」、すなわち「他なるもの」、ではないものとして現成する。われわれは『精神現象学』の

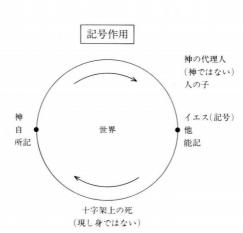
もっとも単純化して言うなら、同一性とは、非同一性の同一性である。最初からあるのではなく、おれは、

達したときに初めて現実であるような、円環である。

(『精神現象学』序論

樫山欽四郎訳)

ほとんど下図として『初期神学論集』を読むことができるように、この二重の否定性が自/他のあいだを「媒介する



0

契機の間に渡されたタラップである以上、

記号は一つ

記号というものが移行の場であり、 十全な現前の二つ

の現前から他の現前への臨時的な〔provisoire =見るた

定性であることか。

る

(上図参照)。

死を賭して闘う運動は、

円環を閉じるこ なんと役立つ否

とができ、

あいだは回収されるのである。

はたらき」は、

イエスの化身 (incarnation) の写し絵であ

られい 8 わち根源的現前と、 0 (審級)〕は一つの歴史をもつ。そればかりか、記号作 [signification] は把握された歴史でさえある。 すな [relevee(止揚され)] うる。 回付としてしか機能しない。 最終的現前における、 記号の過程 タラップは再び揚げ、 根源的現前の proces

ら分離されてしまっていないであろう。そのときには、記号の時間は回付の時間である。記号は みずからの臨時性 (provisoion (見るためのものであること、 五九 〈自己への現前〉 貯え)」 0

を記号し、

現前を現前自身へと回付し、

Í

スにおける、

絶対的概念おける〈自己のもとにある〉の意識は、迂回の時間と記号の時間の間しか自分自身か

円環的再我有化との間の歴史。

絶対知の

〈自己への現前〉、

134

させてしまっているであろう。 円環性を組織づける。久しい以前から、失われた現前の運動はすでにみずからの再我有化の過程をかかわり合いに (ジャック・デリダ 「竪坑とピラミッド」 高橋 允昭訳)

しろ、故郷イタケーに帰還し、妻、ベネロベイアの求婚者たちを倒して再び同一性を掌中にする限りでの迂路迂路で ギリシャ以来の形而上学の全領野を覆ってきた、といえる。それもブラトンやアリストテレス以来というよりは、あ 世界において、すべては一巻の書物に帰着するために存在する」と言い切ることができた所以がここにある。 すなわち、動詞の物語が、主語を現成させる。それゆえに閉じられた円環のなかに世界は在る。マラルメが、「この らば、すでに見たように、記号の〈~でない〉は、最終的に〈~である〉に回収される。終わりという目的、 のホメーロス以来というべきであろう。オデュセウスの旅路は、たとえ十数年にわたる妨害(=否定)に出会ったに ち「最終的現前」は、始まり、すなわち「根源的現前」となって見事に円環を閉じる。その「間の歴史」(傍点筆者)、 記号の旅は、デリダがいうように、迂路をとることである。ただし、故郷に帰還する限りでの迂路である。 介された知の戦略としての記号の旅は、 ニーチェのいらように、キリスト教が俗流プラトンであるとするなら、 いうな すなわ

今日に至るまで社会や制度や交通の枠組を塗り替え、さまざまな文化や芸術を産み出してきた。人工頭脳やヴァーチ 月をかけて彫琢してきた構想力内部の歴史なのである。なるほど、この構想力は、反転の論理や変革の思想となって、 ことではない。記号自身の、所記/能記のあいだの歴史なのである。男たちが案出し、実に、二千数百年を超える年 だが果たして記号は円環を閉じることができるのであろうか? 右に述べた歴史は、単に線的な時間で起ってきた あった。

力に、ただ「生産的」という形容詞を王冠としてかぶせることによって、ほんとうに世界を掌握することができるの ァル・リアリティでさえ、その申し子である、と言ってよい。しかし、 われわれは今、このような近代的知の構想

いは、少なくともこの底石だけは疑われることから免れてきたのではなかったろうか。疑う精神だけは疑いえないも は、今日に至るまで、人の子に名づけることの特権を保証し、隠喩の構築を支えてきた揺るぎなき底石である。ある ベケット文学が分け入ろうとしたのは、まさしくこの、知の領野であった、といってよい。右に述べてきた構想力

2 あいだの奪取

である。三部作と称されている最初の作品、『モロイ』は、モロイとモーラン、追う者と追われる者のあいだの小説 がゴドーのやって来るのを今日か明日かと「待つ」あいだの芝居であった。「待つ」とは、坂部恵によれば、「間・つ」 である。『マロウンは死ぬ』は、死に至るあいだの物語である。最後の作品、『名づけえぬもの』も、 トは、 奇妙な言い方だが、あいだの作家であり、劇作家である。『ゴドーを待ちながら』は、二人の浮浪者 むろん、その例

は成りえない。このことはすでに述べた通りであるが、自己が生成するためには、当然のことながら、 動詞が主語を決定する記号作用のトポスは、自己が自己として生成する磁場でもある。自己はそのままでは自己と

する。他者が他者として立ち現われて初めて自己は自己と成りうる。『名づけえぬもの』は、いうならば、他者と ことができ、自己は自己の固有性を獲得して自己へと帰還することができるのであろうか?「そのためにどのような のあいだの物語である。だが、果たしてこの他者としてのあいだは、自己にとっての否定的契機となる

ベケットはここに、しゃべる「巨大なボール」と化したおれを登場させる。

磁力作用が働くというのだろう?

れない。内璧、いや、地べたと思いこんでいるのは、なにかの液体かもしれない。ともかくおれは自由になりたがっ ここは広大無辺の場所かもしれないし、「直径十二フィートぐらい」のところ、ひょっとしたら頭蓋のなかかもし

ている。しゃべるのをやめることができ、溜る「命の涎」をたらす自由。しゃべらなくても、 でもどうやってやればよいのか? これまでもおれには大勢の頼れる仲間(company)がいた。マーフィー、 ければならないのは、あの先生とかいうお方がおれに下した「刑罰」だからである。むろん、なんでだかわからない。 で充満しているような沈黙の自由。だがそのまえに「例の学課」をやりおおせなければならない。 いだったか、おれがだれなのか、つまり、おれの物語をしゃべらなければならない。おれがこの「学課」をこなさな おれはおれであること おれがどんなぐあ

……マフード。やつの先にほかにも大勢いたぜ。自分をおれだと思いこんでいたやつが。……マフードが前任者た

ロウン……。だがいつだって騙されてきた。今度こそ騙されないように、

ちよりうまくないというわけではない。やつの肖像画、片脚だけ残っている立像を仕上げるまえに、

おれ

の代理として存在するやつは脚なしの、躄だ、これで決まりだ、頭に丸鉢のっけて尻を土埃のなかに、千の乳房を

ように、やっぱりおれたちが同一人物だとしたらどうなんだ?もっともおれは違うと思うね、 のおまえに見えはじめるさ、通行人たちのあいだでね、それまではマフード、こいつは漫画だね。やつが言 たことがない、 ちは面と向かいあっている。マフードとおれ、おれの言うように、おれたちが二人だとしてもだ。 いい思いつきだ、他の手足もどんどんもいでいって、そうすりゃいつか、十五代も経れば、 おれにはやつが見えない、…… (傍点 おまえはきっと本物 ……ほうらおれた 筆者 おれはやつを見

持つ大地母神テルスさまのうえにどっかり、こう言ってやった方がやつには柔らかに響くんじゃないかな。まった

きることができれば、その暁には、おれはマフードではない、とか、マフードであるとか言うことができる運びにな れにできることは、 ておれの代りをする、ないしは、おれに対する者の謂いである。いうならば、自己内他者である。 (=まえに立てる)ことはできず、したがって眺めまわすことも、ましてや、語ることなどできようわけがな それこそ万々歳である。なぜならそれがおれの物語のはじまりとなるはずだからである。ところがどうであろう マフードは変幻自在で、すでにして定かならぬ「仲・間」である。だとしたら、 の条りが示すように、おれはマフードを「代理」に立てる。「代理」 (vice-exister) とは、この場合、おれから出 この他者を他者として描き出したいと思っている。たとえ「漫画」になろうとも、「やつの肖像画」を描き ただこの「仲・間」へと関わりつつ、しゃべりつづけることである。いつの日か、マフードに関 他者を他者として対象化する おれは、できるこ

130

しゃべりつづけることは、おれの(?)物語のなかでは、歩きつづけることに重ねられている、と言ってよい。

おれの物語を始められるかもしれないという期待をこめて。

ける、 L たのかもしれない。それも真っ直ぐに進むことなどとても無理。どんどん狭まっていく螺旋を描いて、最後にはに れは「老衰性の壊疽」が因で片脚を失くしてしまい、松葉杖をつきながら、「隠れ穴」を求めてさまよい歩いて といってもせいぜいで十歩ぐらだったかもしれない。おれがマフードだと思いこんでいた頃は地球を マフードがすんでのところで、おれをおホモだちにしてしまいそうな、そんな時もあった。とにかく歩きつづ 一周して

死骸を目のあたりにし、あちらこちらに散らばる顔や腹にぶすぶす松葉杖を突き刺しながら、「行ったり来たり」し らしい。だが実際は、片腕も失くした(これもマフードの情報だが)、おれは不器用な旋回を続けてとうとう家族の 確認すると、みんなでお祈りをして眠るのである。マフードが言うのには、 内では家族が逆方向に回っていた。夜になると覗き穴から代る代るおれの見張り番をし、少しずつ近づいてくるのを 円形の窓なし小屋があり、両親や女房、八、九人のがきがひしめきあっていた。おれが外でぐるぐる回っていたら、 たりだ、家族に会おうと内陸に向かう。気がつくとだだびろい中庭にいた。 たのは、「ジャワの海岸沖か、腐肉の臭いを放つラフレシアが赤く咲くジャングルか、インド洋か」、なんでもそのあ ちもさっちもいかなくなるか、逆に果てしなく広がっていく螺旋を辿って終わりがなくなるかだ。片脚を置いてき のボ ツリヌス菌にやられてみんな中毒死してしまったからだ。漂い来る腐臭にたまらなくなっておれは引き返した おれは結局、 高い塀に囲まれ、 家族には会わなかった。罐 真中には丸屋根のある

やつらがおれに語っていたんだ、おれに説明していたんだ、おれに述べたてていたんだ、こういったことすべてが ……死骸だの軌道だの空だの大地だののことはもらいい。こういったことすべておれには何のことかわからない。

次の旅に向かった……。

としかしゃべれないなんて 誰であるか、どこにいるかをおれに言わせないように、 きゃならないとしても、それが出発点になる、沈黙に向かって気違い沙汰をおしまいにする一歩を踏み出すことに んなやつらから出ているのさ……今おれがしゃべらなきゃならないのはおれのことだ、たとえやつらの言葉でしな か いことをさせないように、 なる、しゃべらなきゃならないという気違い沙汰のね、おれに関係のないことしか、つまらないことしか、 こったようなふりをしはじめていたにちがいない。……おれのしゃべることや、おれのしゃべるてだてなんて、み .のことか、何に見えるか、すべてが何のためか何千回も、何千回も関連づけて、それでとうとうおれがまるでわ おれのしなきゃならないことをさせないように、やつらがおれにしこたま詰めこんだこ おしまいにできる唯ひとつの仕方でおれがしなきゃならな おれ

おれ くのさ、 よ、こういった息苦しいつぶやきをおれにしこたま詰めこんだのもやつらさ。それでみんなそっくりそのまま出てい 葉の他有化が生じてしまっているのだ。しかし、こう言っただけではおそらく充分ではない。おれのなかで発症して ゃべることはすべてマフードとその一味の管轄下に置かれている。「この迸るたわごとを指揮しているのはやつらだ しまっているのはトポ `とだって変えられやしない。おおむだよ、やつらがぶちあたっているのは、おおむだよ」 (傍点 にカタチを与えるべくおれはしゃべらなければならない。それなのに「他人の言葉しかない」。おれのなかで言 おれ はいかにも聞こえてくるやつらの言葉をただ吐き出すだけさ、相も変わらぬ例の酸っぱい教えをね、ち ロジーの反転ともいうべき事態である。しゃべっているのは確かにおれである。ところが、し 筆者)。だとすれ

六五

128

n

《は海を吞み干さなければならない、だとすれば海はあるってわけだ」と云うように、

カタチなき海のような

頭部分で、肯定や否定に「ウンコをひっかけてやるか」と予見していたのは、まさしくこの意味においてであった、 ば、おれがおおむである、とおれの場所で言っているのもやつらだということになる。むろんおれは、おおむである え言えないのである。ただし、 おおむでないともいうことはできない。のみならず、おれは何もわからないのだから、言えないということさ この二重否定はヘーゲル的文脈での肯定には決してならない。 先に引用しておいた冒

がおれの物語を語りはじめている。当然のことながら、 おれがマフードの物語を語っておれの物語のはじまりを見出すはずの、まさにその場において、マフードとその一味 今もそのことに変わりはない。ところが、しゃべるにつれておれに出来してくるのは、トポロジーの反転であった。 ということは、 おれは「仲・間」のマフードと関わることによって、できうることなら、 間を間として画定し、マフードの物語を語りおおし、おれの物語のきっかけを掴みたいと思っていた。 それらは「おれに関係のないこと」ばかりである。 おれとマフードを区別して、 おれは依

次の旅に出て……とうとうしまいには、おれは四つん這いで地面をころげまわりながら進むようになる。 だがらといって、というよりはむしろ、そうであればなおのこと、おれはしゃべるのをやめるわけにはいかない。

然としてそこからの剰余としてあらざるをえない。

から 出し、甕底のおが屑を取り替えてくれる。おまけに、雪のちらつく日などはシートをそっとかぶせてくれるではない 傍の甕のなかに「花束のように」投げ込まれている。週に一度、 か手足はすっかりもがれ、もっとも真中の足は別だが、「ビリケン頭の胴体」だけとなって、今では屠殺場に近い路 おれが彼女の店の看板に役立っているからかもしれない。甕に貼られたメニューのせいか、 筋向かいの焼き肉食堂のおかみさんがおれを甕から おれは提灯で照らさ

ない·····s にぶつけたり、 れ、甕ごと台の上に乗せてもらっている。だが、おれのからだはどんどんちぢこまっているらしい。首枷を嵌められ 目を閉じたり開けたりして、しきりとおかみさんに信号を送るのだが、どうもよくはわかってもらえ まだ首も動かせるし目をパチクリさせることぐらいはできる。もっとかまってほしいと、

私の臆見にすぎない。しかし、ランボーは" Je suis un autre. "とは言っていない。一人称の suis ではなくて、三 は、彼もまたベケット作品のおれを見舞うトポロジーの反転にぶちあたっていたのではなかろうか? むろんこれは 人称の est である。ということは他者の動詞であろう。おれの場に他者がいるのは確かであるが、おれは他者を動詞 い。又しても、 お れの存在の第三の証人も得られないまま、 ランボーの言う「おれはひとりの他者である」。かってランボーが、"Je est un autre."と言ったの おれの話は突如として「尻切れとんぼ」になる。マフードの仕業らし

とがいったいマフードになんの関係があるんだろう?」ということになる。おれの物語は、「仲・間」の「仲・間」化 おれはマフードでない、とも、ある、とも言えた義理ではない。結果は、「人間がこうであってああじゃないってこ に振舞ってきて、客体化できるかなと思うや否や、たちまち場の反転に見舞われ、おれは代理の代理にされてしまう。 そのつもりでしゃべりつづけてきたのである。おれはおれの代理としてマフードを立て、まるでやつであるかのよう その次に「おれが彼であるかのように、おれという人物 (the creature I am) について」しゃべる手筈であった。事実 おれは、まずもって「おれではない人物 (the creature I am not) について、まるでおれが彼であるかのように」、

として遠ざかるばかりである。

たない。事実、マフードをどうにかしようとして、さらに別の代理を立てる。ワームである。 この動詞ようもない「仲・間」は、「言葉の問題」、「声の問題」――声については後に述べるが――でありつづけ 依然として主語以前であるおれは、「主語なんてどうだっていいや」と言う。しかし、これほどのこだわりもま

誓ってもいいが、もうひとりのやつはおれを捕まえなかった、おれはやつから解放されなかった、そいつは過去の てことはない、やつはおれを捕まえないだろう、おれはやつから解放されないだろう、やつってワームのことさ、 もうひとり別のやつが今もおれを追っ掛けているかどうかすぐにわかるさ。だがたとえそうじゃなくてもどうっ

これでおれたち 話 そいつはあのお方おれの魂さま用だ、あのお方の居場所がわかっていりゃとうの昔そいつにひっかけていたのに。 する新たな日に向かい、 現在までのね、 は四人になる、互いにたむろして。 おれは捕まらない男、 救命帯をまといつけ、難破を懇願している。三番目の釣り糸が天から錘を垂らしている、 解放されない男、ボートの横木のあいだを這って、燦然たる輝きを約束 わかっちゃいるさ、おれたちが百人いたとしても百一人目が不

足なのさ。 おれたちにはいつもおれが欠けているのさ。

おれは主語として生成する。おれはマフードという迂路を経て、自己へと帰還することができ、円環を閉じることが (Manhood) という本性のなかに「溶けてしまう」(ヘーゲル)からである。そのときおれの物語は完成し、 フードが「おれを捕まえ」ていたら、 「解放され」る。おれはマフードであるからだ。 非同一性の同一性が完遂し、マフードとおれのあいだの「と」は回収され、 おれは、述語のマフード (Mahood)、すなわち、 人間性

黙の休息に憩うことができる。ところがそうそうまくはいかない。「マフードの話を今まで以上にうまくわかりやす く話しはじめるためには、ワームについて話そうとすればいいんだ」というわけで、ワームにとりかかる。だがどう できる。表象は (representation) は再現前 (re-presentation) を遂行し、おれはしゃべるのをやめることができる。沈

やら結果は同じことになるようだ。

マフード/おれ

フードとおれ/おれ

フードとワームとおれ/おれ

マフードとワームとX君とおれ/おれ

フードとワームとX君とY君とおれ

/おれ

マフードとワームとX君とY君と……とおれ/おれ

容易にトポロジーが反転してしまう「仲・間」とのあいだを奪取しようとする、まさにそのことによってあいだが

湧出してしまう。いうならば「と」だけが、「と」~「と」と増えつづけていく。「おれたちが百人いたとしても百一

人目が不足」するように、おれは無限後退していくばかりである。おれは生成しない。 木村敏が、「内的差異が内的差異として持ちこたえられていないところに超越はなく、超越のないところに自己は

こと」である。さらにつけ加えるなら、上に(meta = over)移し運ぶ(pherein = carry)ことである。 とは、ハイデガーの指摘するように、ギリシャ語で、メタフェーレイン(μεταφέρειν)、すなわち、「移し運ぶ

ない」と言うように、ベケットの、動詞ようもない「仲・間」の物語は、同時に、隠喩の消滅の物語でもある。隠喩

六九 (124)

比喩的なるものはただ形而上學の内部にのみ存するのである。 的なる表象も亦崩壊して行くのである。比喩といふこの表象は、言葉の本質についての吾々の表象に基準を與へて ゐる。それ故、比喩は、試作や藝術的形成一般に屬する作品の解釋に際して、常套手段としての用を果してゐる。 なる思惟の仕方といふ地位を、失ふのである。形而上學の狭隘さが洞察されるとともに、《比喩》 的なるものとのこの區別を擧立することは、 ないまでも、 、移し運ぶ》とか比喩とかいふ表象は、感覺的なるものと非感覺的なるものとを、二つの自存的境域として分離 區別することの上に基づいてゐる。感覺的なるものと非感覺的なるもの、自然的なるものと非自然 ふ事柄の一つの根本趨勢である。 形而上學と稱せられる西洋的思惟を基準決定的なる仕方で規定してゐ 感覺的なるものと非感覺的なるものとの上記の區別が、 形而上學は、 とい ふ基

(『根據律』 辻村幸一 ハルトムート・ブフナー譯 傍点とルビ 筆

いゆえに、「釣り糸」によって上へと引き揚げられる(「移し運ばれる」)ことはついに起りえない。「と」のタラップ のマフードには、すでに見てきたように、主客の区別はとうに失われている。「おれの魂さま」の居所も画定できな のはただ塵だけだ。 '名づけえぬもの』を書きおえたベケットは、次のように述べたといわれている。「……ぼくの作品の終盤にある 存在」もない。主格もなければ、 ……最後の作品、 『名づけえぬもの』では崩壊が徹底している。「私」もなければ、「持つ」もな 対格もない、動詞もない。つづけていくてだてがない」、と。おれと「仲

はどこまでも揚げられることはない。

家」でありえたことを思い合わせると、ベケットの洞察は、異常なまでに研ぎすまされていた、と言える。それゆえ かし、ハイデガーでさえ、三人称単数の動詞から「存在」の概念を引き出している。そして、言葉は、なお「存在の そのほか何であれ、平板な区別が、生きた「〈事態に〉充分に届かないものたるを免れないといふ洞察」による。し 『名づけえぬもの』が、隠喩の消滅をも告知しているのは、ハイデガーの言うように、精神と身体、意識と無意識

話化せずにはおかない。 の、とりわけ現代詩の拠り所であった「ボエジーは否定性である」、あるいは「不連続の連続」といった詩学を非神 に、ベケット文学は、二五○○年余りにわたって西欧を支えてきた土台をなし崩しにするのみならず、マラルメ以来

作品の引用は、Samuel Beckett, The Unnamable (Grove Press, New York, 1958) による。

地蔵の田仕事再考

―― 福島県の鼻取り地蔵譚を中心として――

紙谷威

廣

柳田國男は『日本の伝説』のなかで、「伝説と児童」の表題の下で小文としてまとめている。(1) ると、日頃信仰していた地蔵の変身した姿であったという伝承である。この伝説は日本各地に分布するものであり、 鼻取りをする手伝いがいなくて困っていると、どこからともなく少年が現れて手伝ってくれる。この少年の正体を探 福島県の東白川郡からいわき市周辺にかけて、「鼻取り地蔵」と呼ばれる伝説が広く分布している。代掻きの馬の

Ι

はじめに

るとは思えない。なぜ、この地方では馬の鼻綱をとって代掻きの手伝いをしてくれるのが、変身した地蔵菩薩なので しかし、この柳田國男の論理では、「地蔵菩薩」が出現して、田仕事を助けるという伝承の必然性を説明しきってい わち童形で出現する「道祖神」や泥をぶつけられ、あるいは水につけられて降雨を願ったりする雨乞いの神である。 そこで、柳田が問題とするのは地蔵菩薩という仏教的存在ではなく、仏教の伝播以前にあったと推定する神、すな

あろうか。

必然性について明らかにすることである。そのために、本稿では田仕事を手伝う河童にまつわる伝承と比較しながら 題であるように思われる。 具体的な地蔵菩薩という存在が民衆に選びとられた理由は、仏教以前という超歴史的な解釈では解決のつか したがって、第一の目標は、 伝承を分析する中で田仕事の手伝いを地蔵菩薩が引き受ける かない問

地蔵が選ばれてくる理由を論じる

伝承母体を明らかにしておきたい。 の成立基盤となる社会の特徴については十分に論じてはいない。そこで本稿の第二の論点として、鼻取り地蔵伝承の 承として、地蔵が姿を変えて出現し田植えを助けたのは、 鼻取り地蔵などの伝承が保持された基盤としての社会の特徴を考えてみたい。特定の「家」にまつわる伝 いかなる理由であったのだろうか。柳田はこのような伝承

められたのであろうか。本稿の第三の論点として、東北地方における稲作と仏教信仰の関係について論じたい。 という農耕過程の中に、地蔵菩薩の利益が生じると説明したのは一体誰であったのか、また、どのような契機から広 かにされているとは言えないであろう。水田稲作に関連して、仏教が関与してくるのはなぜなのであろうか。 これに加えて、 稲作農耕の一過程としての田植えに、鼻取り地蔵が活躍するのはなぜであろうか。その理由 田植え 明ら

Ⅱ ねぎを嫌う地蔵と蓼を嫌う河童

福島県東白川郡矢祭町中石井地区の柵にある青砥家の地蔵は馬の鼻取りを手伝ってくれたとの伝説がある。 この伝

ので、それ以後ねぎは作れない家例となったというのである。(2) 承で特徴的なのは、 仕事が終わってから出された食事にねぎが出されていたために、地蔵の変身である事がわかった

取りをする人手さえもなかった。すると一人の少年が現れて、馬の鼻竹を取って泥だらけになって働いた。夕食にな 薩への供物としては、ねぎはふさわしくない作物である。さらに、矢祭町では、家例として禁忌作物となっているも という家例を設定した事である。 た。この日には多少の雨が降ったという。この地蔵には、「花採地蔵」の名前がつけられている。(3) はいけないというので、菩提寺の龍光寺に納めて、「地蔵田」から取れる米で餅を作り、 この地蔵が盗み出されて、 はねぎを作らない家例となった。後に我満平に移転した青砥家は、長屋門にこの地蔵を祀った。ところが、ある夜に 坂道でねぎ雑炊を吐きながら登った。この様子に気付いた村人が少年の後をつけると、青砥家の地蔵堂の前で倒れて、 り「ねぎ」の雑炊が出された(ねぎのぬたが出されたとも言う)。この少年は食べた後、帰る途中で腹が痛 ここで注目しておきたいのは、 この伝説の概要はつぎの通りである。すなわち、昔青砥家では田植えをするのに人手がなく、田の代を掻く馬の鼻 鼻取り地蔵として深く信仰する事となったが、ねぎを作ると一族の間で不幸が起こるので、 雨乞いのためか久慈川の河原に投げ出されて、無惨な姿で見つかった。 ねぎが地蔵の禁忌食物となっている事と、そのために、青砥一族はねぎを作らない 仏教の僧侶の間でも、 ねぎのような香りの強い野菜は禁じられる事がある。 毎年六月二四日に祭りをし 地蔵を粗末にして 青砥

同郡棚倉町大字下山本の「韮地蔵」は、まさに「韮」という禁忌食物が主題となっているようである。 稲刈りの人 のがこのねぎの他にも見られる。青砥一族の家例の由来としての機能を、この地蔵伝説が持っていた事は注目に値す

るであろう。

を吐きながら歩いて行き、 すと、その男は腹が痛くなったと言って、帰って行った。心配した村人が男の後をつけて行くと、途中で食べたもの 手も足りなかったとき、家々の田を訪れて手伝ってくれる年輩の男がいた。ところが、ある家で昼食に韮の雑炊を出 山の麓で急に姿が消えた。そこにあった古ぼけた地蔵の口に韮がついていたので、

姿を変えて村人を助けた事がわかった。この地蔵を韮地蔵と呼んで、

信仰したと言う。

栽培についての禁忌は触れられていない。そういった点では、「花採地蔵」の伝承とは展開を異にしているのである。 韮がついていたために、その正体を知る事ができたのである。しかし、ここに採集されている範囲では、 この伝承では、年輩の男に姿を変えた地蔵が、稲刈りの手伝いをしたという設定になっている。また、

伝いが得られなくなったというモチーフを取り上げて論じている。(5)

徳爾は「田仕事と河童」で、田仕事を手伝ら河童によって繁栄した「家」と、その河童が嫌ら食物を与えたために手

ところで、このような田仕事の手伝いをする存在の問題については、「河童」の伝承を考慮する必要がある。千葉

負けないほど「麦代耕し」に働いた。食物には好き嫌いを言わず、とくに麦飯が好物であった。ところが、蓼の冷汁 つわる河童の伝承である。天文三年(一五三四)午九月下旬に何処からとも知れず、二十歳程の男が現れて、 千葉が最初に取り上げた資料は、 愛知県北設楽郡富山村の『熊谷家伝記』に記載された、天龍村福島の金田家にま

日の夜の夕食にいたずらで蓼を入れた汁が出され、これを口にいれた男は血を吐きながら消え去った。 が出されるとにおいを嫌って、麦飯も食わずに帰って行った。翌年も九月になると麦代耕しに現れたが、 十二月二十

男の通っている間は食膳に魚が添えられていたが、これも絶えてしまった。千葉によれば、蓼は魚を取るときに河

に流す毒であり、若い男がこれを嫌ったのは水界の精であったとされるからだと論じる。さらに、水の中から来た者

との交渉が思いがけない事情で断絶し、魚という恩恵も無くなってしまったと信じられていたように見てとれるとし

童のしくじりによる報恩という伝承が一般的なのである。この周辺部の伝承では、「カワランベ」が田植えの手伝 また、 『熊谷家伝記』には、この男の正体が記載されていず、「家」との交渉の開始も書かれていないが、

をしたり、田仕事の農具を貸してくれたり、膳や椀を用立ててくれたりするが、蓼の汁を食ってからは出てこなくな

童と絶縁するために、河童の嫌ら食物を与えたと伝えているのであるという。 する恩恵は「水界の精」の一方的な恩恵がより古い形態と考えられること、これを気持ちの悪い現象として人間が河 千葉が問題にするのは、このような伝承は「水界の精」と特定の家筋とに交渉があったこと、それらの「家」に対

るのである

を得なかった。そのことが、河童への供物を供える伝承として、「村」の主だった「家」である開発地主としての との関係があることを指摘する。すなわち、水の不十分な地域において水田を開くために、水界の霊力に依存せざる そして、このような伝承が中部山岳地帯に分布する理由として、冷水掛りなどの田には適しない山間部 田

|草分け」に、この伝承を成立せしめることとなったというのである。

千葉はこれらの三遠信国境地帯と共通する河童伝承が、九州や南島にも存在することを指摘する。そして、

いら、 その基盤となる社会・経済的な特徴を小規模な湧水田に依存する、草分け百姓とその従属的な家族による農業経営と 古典的な家族に求める。したがって、河童を妖怪化せず、神として信仰する態度を維持させたと見るのである。

島県東白川郡矢祭町とその周辺部にみられる、 地蔵の田仕事の伝承と食物禁忌の関わりについては、

166

触れた時に断絶するというものである。したがって、田仕事の手伝いをしてくれる存在は地蔵でも河童でも、

指摘する開発地主と河童の伝承との関係と類似の伝承と見ることが可能である。すなわち、この伝承の基本的

は

「異界」の存在が田仕事を手伝い、特定の「家」の繁栄を助ける。

しかし、

その関係は

「異界」の存在の禁忌に

「異界」の存在でありさえすれば、伝承の構造の中では置換が可能だった。

小規模な開発領主としての「家」という社会的な基盤であったといえよう。 のモチーフは変換が可能であり、 そらいった観点からすれば、他地域で伝承される「地蔵」の田仕事のモチーフと、「河童」の田仕事= 地蔵と河童は置換が可能であったということになる。その置換を可能にしたのは 水界の霊力

東白川郡に分布する の開発地主の 「家」と水界の霊力との交渉に由来する伝承としての位置づけを認める事が出来るであろう。 「鼻取り地蔵」譚の地蔵が韮や葱を嫌ったのは、「異界」の神との交渉の断絶に至る経過を説明 福島県

代掻きの馬の鼻取りを、変身した地蔵が引き受けるという伝承については、

河童の田仕事伝承との比較から、

山間

すると同時に、他方では禁忌食物としての「家」の伝承によって、「村」における「家」の特別な地位をも明らかに

していたのである。

ことを鼻取り地蔵の伝承は物語っていた。言葉を変えれば、従属的な家族を含み込んだ、同族団的な労働によって水 |耕作が営まれるとともに、「村」における支配的な「家」としての位置を示していたと言える。こ すなわち、 東北地方の山間部における湧水田等の小規模の水田開発は「大家族的」な 「家」に依存していて、その

この伝承の中で、 代掻きを行う動物が馬であったことは、牧を多く有していた東北地方の特性によるものである。

そして、馬であるが故に「鼻取り」という労働をも生み出していた。牛はおとなしい動物であるが、馬は対照的に扱

地蔵の出現が待たれた。 いにくい家畜であった。これを子供が扱うことは容易ではなかったと言う。 したがって、そのためにこそ子供を救う

チーフが日本の各地にも見られる。 名馬を産ませるのは水界の霊的存在とする信仰が広くユーラシア大陸に広がっていたこともよく知られている。 いたずらした河童が逆に馬屋に引きずり込まれた結果、 地蔵の田植えの伝承に、河童の伝承と類似する結末が生じるのは、馬が対象とされているからでもある。 人間に魚を贈ったり、 田植えの手伝いをしたりするというモ

に近い信仰が表出している伝承である。(8) 葱や韮を嫌う伝承は河童に由来すると見てもよいかも知れない。そうだとしても、その伝承は信仰に近いものであ 地蔵の田植えのモチーフは、 千葉が指摘するように、 いたずらで人間を困らせる妖怪に零落する以前の、「神」

Ⅲ 泥にまみれて働く地蔵

代の武将である鎌倉権五郎景政の守り本尊であったとされ、源義家に従って後三年の役に参加した権五郎景政が堤村 は大同二年(八○七)弘法大師によって作られた二体の仏像の一体であるとされ、 ったが、一体は摂津の六甲郡森部村に移され、 福島県東白川郡棚倉町の大字堤 住職によって書かれた「沖の鼻取地蔵菩薩略縁起」という縁起もある。これによれば、 (旧堤村)の延命山地蔵院普賢寺にある「鼻取り地蔵」の伝承は、寺の境内に祀ら 残りの一体が延命山に安置されたのであると言う。 高野山の麓の紙屋村という所にあ この地蔵は鎌倉時 鼻取

二九

164

に定住するときに祀ったものであるとされている。

記載されているが、この略縁起は天保一五年(一八四四)に作られたものである。 〜六才の小僧がやってきて馬の鼻づらを取って上手に鼻取りをしてくれた。仕事が終わった日に、沖の地蔵様にお参 に沖の地蔵尊を信心していた。ある年、この男の妻が病気になったため、一人で馬を使って田を耕していると、 村人の崇敬を受けていたが、永禄年間(一五五八~一五七〇)に貧しい百姓がいた。信仰心が篤く、 お地蔵様の顔が鼻取りの小僧によく似ていて、足には泥がついていた。 このような伝承が「略縁起」に

水につけられたりしたものであったことを想起させる。 しろ、多くの変化を経てきた仏像ということになる。むしろ、ここでは仏像が傷つけられており、泥をつけられたり、 らに普賢寺に戻されたと言う。したがって、寄進された田などはわからなくなったとしても当然であろう。 また、地蔵田があったかどうかといった点にも触れられていない。この地蔵菩薩は、普賢寺から長慶寺へ移され、さ 略縁起の性格上からと考えられるが、霊験譚的な記述だけで、禁忌作物になっているかは明らかにされていない、

の足が泥土で汚れていたので、 見たことのある子供が近寄ってきて、馬の鼻面に手をかけて、鼻取りを始めた。すると、瞬く間に代掻きは片づいて 代掻きをすませようと焦っていたが、日も暮れかかり馬も動かなくなってしまった。途方にくれていると、どこかで しまった。家で夕飯を食べて行くように言うと、子供はどこへともなく姿を隠してしまった。 この話が他の伝説と共通しているのは、突然出現した少年の鼻取りの技術が、異常に優れているという点である。 倉にも同様の伝説が伝えられていた。戸倉村に源右衛門という百姓が住んでいた。その日 子供の正体が地蔵であるとわかった。この地蔵を鼻取り地蔵と呼んでいるのである。 地蔵堂に行くと、

同郡鮫川村の戸

のうちに

鼻取りという作業は、子供達にとってかなり難しいものであったという。馬を操ること、馬鍬押しと調子を合わせる は異常に優れた技術を持っているのであり、ただの少年ではないことがそこで明らかにされているのである。 ことなどや、泥まみれの田の中での作業といったことは決して楽なことではない。これらの伝承では、 いわき市に伝えられる伝説では、代掻きを手伝う子供の苦労が話の中心におかれているように思われる。いわき市 出現した少年

永崎の鼻取り地蔵について伝えられる伝説は、次のようになっている。

こと怒ってばかりいたんだ。「下手だ、下手だ」と。 昔、永崎の地蔵さまの下の田で、百姓、馬使って土起こしていたんだと、そんとき、馬の鼻取りしていた子供

そこんとこさ、何処から来たんだか知んねけんとも、顔かたちの良え、年の頃十二、三歳の小僧が鼻取りして この子供っちゃ最上者でもあったんだっぺ。ぶんなぐったり、文句言ったりしたんで、泣いちゃったんだと。

やっからと言って、してけたんだと。 いやいやなんとも上手であったっち。終わったっけ、すぐ姿消えちゃったと。田おこしもできたんで、

うになったんだと。(江名、田中マツ) っぺとして、なんの気なしに地蔵さま見たっけ、顔さ泥、いっぺえくっつかっていたと。 子供の難儀見て、地蔵さま鼻とりしてけたんだっぺ。そんでこの地蔵さまこと、「鼻とり地蔵さま」と言うよ

ここで言う「最上者」は、労働力として貰われた、あるいは買い取られた子供であったろう。鼻取りに使われた子

供 いの哀れさをより強めているとも思える。いわき市平大字下大越の古江道にある「代掻き地蔵」も、またこのような

ら下泥だらけになっていたって言うんだね。(根岸、坂本喜孝)(2) どりやってやっぺって、(中略)「それ押せ」って言うべと思う間に押しちまうし、「引け」と言うべと思うど引 きちゃったんだって。そしたら、どこの子供だかわかんねけど、一二・三歳になる女の子がやってきて、その鼻 れ引けって、それねんちゃう」怒ってばっかりいるもんだから、涙流して、子供いやんなっちゃって、あかって いちまう、一つも言うことなくスムースにその田一枚掻いだ。そうして消えちゃった。(中略)地蔵さまが首か 藤兵衛は怒りんぼうな人であった。一二・三歳の子供が鼻どりをやった。その鼻どりやんの、「それ押せ、そ

県有田郡清水町杉野原と久野原には、御田打という芸能が伝えられているが、このなかに牛が登場する。 が八月二四日の祭りに供養してくれたという。いずれにしろ結論的に言えば、稲作の労働を助けてくれるのである。 ばともかく、地蔵菩薩の女性への変身は多くはない。この地蔵菩薩については咳を直してくれるとも言い、念仏講中 ところで、ここで問題にしたいのは「代掻き」という農耕技術とマンガ(馬鍬)という農具の問題である。 この資料で注目されるのは、地蔵の変身した子供が女性であったことである。管見に入る限りでは、観音菩薩なら 和歌山

西日本では、牛が農耕に使役されることが多かったのである。広島県比婆郡東城町塩原や同郡比婆町の「大山供養田 の場合の牛は田起こしに使われるだけである。また、山陰地方の花田植には、実際に牛が登場して田の代掻きをする。

がきの技術が代掻きの出来具合を決定していたようである。(1 植え」などでは、死んだ牛馬の供養が神官と僧侶によって行われた後に、牛による代掻きと早乙女の田植えが行われ 牛による代掻きには馬鍬は使われず、 田を踏ませてならすだけであるが、このような形を「綱がき」という。

綱

に な る。(う であったという。 敗した実例が記載されている。その理由は、馬が田の隅々まで歩いてきれいに田を掻くのに、牛は早々に角を廻るた め二重の手間がかかるというのである。掻き残した部分を補うのに、賃鍬と称して人を雇うために費用は 近世の農村に関する『地方凡例録』には、 代官の一方的な施策に対する反発があったのかも知れないが、事実として馬が卓越して使役されていたので したがって、田をならすには牛を使らよりも、 寛政年間に甲州の一代官が馬の代わりに牛を取り入れようとしたが、 口取りの必要な馬の方が効率的であったということ よけい必要

から が、 引かせて田起こしをする牛耕が始まり、それにともなって牛による代掻きが行われるようになったのである。 その水田には人間の足跡と共に牛の足跡が発見されている。これが代掻きの際の足跡であるかどうかは明確では ところが、考古学的な研究の成果によれば、福島県相馬市の大森A遺跡に弥生時代の水田遺構が発掘されてい 東日本には牧が多くおかれ、馬の産出地として知られていたのであるから当然の事とも言えよう。 馬鍬も福岡県から福島県にいたる範囲で発見されているので、弥生時代には牛による代掻きが成立していたこと 牛による代掻きは昭和三○年に始まっているという。それ以前は馬によっていたというのである。牛に犂を 牛による耕作が先行したにも関わらず、馬が使役されるようになったのは、東日本の畜産事情の特徴 新潟県の蒲原平

からくることかも知れない。

明治時代までは基本的な変化はない。(8) 馬鍬」が記載されているが、これも田起こし用であった。(ユヒ) つか 代掻きに使用される馬鍬の形態は弥生時代のそれから、平安時代に鉄の歯が使用されるようになったことを除けば、 2 た「振り馬鍬」といった土を砕くための道具なども見られたし、 地域毎に歯の角度や歯の数には違いがあるが、根本的な変化は少ない。 田植えの前に水をはった田で使用する馬鍬には基本的な変 江戸時代の文献には回転式の歯を持っ 人力を た 車

化はなかった。

が ち、大日如来もしくは地蔵菩薩の化現・垂迹である智明菩薩の名の下で、牛による代掻きという農耕技術が伝えられ 塩原の大田植えにおける僧侶の表白文によれば、「智明権現」は大日如来の化現、 あり、稲作を一般化させるにあたって仏教の果たした役割も小さくはないのでは無かろうか。 ら伝承されたのである。地蔵の鼻取りという伝承も、この儀礼による伝承同様に、農耕技術の伝承を意図したもので L 田遊びや御田行事などの儀礼に登場する事である。 なみに、 かし、それにも増して問題となるのは、 伯耆大山の信仰圏にはいる中国山地の大山供養田植えなどでは、 このような農耕技術としての牛馬による代掻きとその道具としての馬鍬 つまり、農耕技術としての代掻きは儀礼の場で確認されなが 大山の智明権現が勧 地蔵菩薩の垂迹とされる。 請される。 すなわ

Ⅳ 地蔵の供養と地蔵田

たのである。変身した地蔵菩薩が代掻きを手伝うという伝承モチーフが成立したことは偶然ではなかった。

現在では、 稲作はごく当然の食料生産に過ぎない。 しかし、 かつては稲は上納品として生産されていたのであり、

下のような伝承が伝えられている。 ら、現世利益的な信仰の領域にとどまるものではなかったように思われる。福島県岩瀬郡鏡石町の鼻取り地蔵には以 行事などのハレの日に食べることができた。その点を考慮に入れると、これらの地蔵の田仕事は単に労働の援助とい 米は一般の人々の日常の食事には使用されなかった。せいぜい、婚姻儀礼や葬式、あるいは正月をはじめとする年中

きた」と道中持参の杖を馬の鼻竿にさしだして、代かきを手伝ってくれました。 ていた。その時伊勢参りの道中だと言う白装束の僧が通りかかりました。手を合せてお願いしたところ、「よし 地蔵堂の供田の田主が、田植準備の代かきをしようと馬をつれてきたが、一人ではどうしようもなく困りきっ

したということです。 あすの朝になって田んぼに行ってみると、衣をまとったお地蔵さんが泥まみれになっているのを見つけました。 おかげで代かきも無事終り田植えまで終ることができました。(中略)振返って見ると、 田主は地蔵様を背負って帰り、水で洗ってきれいに清め、地蔵堂を建てて、その中に祀り、あつく信仰 旅僧の姿が見えない。

た田 ということである。 [があり、それを耕して奉仕する者があったということなのである。矢祭町の中石井の鼻取り地蔵同様に、 |鏡石町の成田地区の伝承で、まず注目したいのは、代掻きの人手に困っていたのが「地蔵堂の供田の田主」だ これは地蔵田の所有者であると解釈できよう。すなわち、 地蔵の供養のために寄進され 地蔵の 耕され

ための供田が用意されていたことは明らかである

が先行することは言うまでもない。地蔵の霊験が地蔵への祭祀を生み出し、その結果として供養の田を提供すること か。自らに奉仕させるために自らの労働力を提供したと言うのであろうか。地蔵菩薩の霊験譚としては、 それでは、 地蔵の供田の耕作のために、自ら姿を変えて労働力を提供した地蔵菩薩とは、一体何であったのだろう

になったと考えられる。

がどうとでてきたわい。だがお昼の鐘の鳴る前に戻らなくては、 りをしてくれた。あざやかな鼻取りの手際で仕事も進んだ。ところが、小僧は「きょうはよく働いたものだ。つかれ あろう。それによれば、市兵衛という百姓が田植えの支度ができずに困っていると、小僧が馬の手綱を取って、 おいらも鐘の音といっしょに地蔵さんになるのだか

福島市の五老内町に伝えられている「鼻取り小僧」の伝承は、この典型的な事例として理解しなければならないで

り地蔵になったのだという。(22) 六道を経巡って、衆生を救うのであると言う。その意味からすれば、鼻取り小僧は衆生を救うために出現し、 この事例で見る限りでは、 鼻取り小僧の消滅 (死を思わせる)が鼻取り地蔵の信仰を導き出している。 地蔵菩薩は 自らの

ら」と思いながら、疲れのために寝てしまった。(中略)迎えに来た市兵衛が見ている前で、小僧は姿を消し、

鼻取

もちろん、この事例は特殊なものと見なすべきであろう。だがしかし、地蔵菩薩が人々を救うために、自らを傷つ

消滅を以て霊験を示し、鼻取り地蔵として祀られたのである。

ないだろうか。たとえば、韮雑炊を食べて、吐き苦しみながら地蔵堂への坂を登る小僧は、 苦悩する存在、 すなわち「代受苦」を実践する存在と信じられていたことは、 他の事例でも同様であったのでは それ自体苦悩する民衆的

仏教者ではないであろうか。そのためにこそ、人々は地蔵への供養を重ねたのであろう。※

いてはあらためて考える必要があるだろう。むしろ、ここでは民衆的視点から理解する意味で、より現世利益的では 田植えの手助けをする地蔵から問題を展開させてみよう。 (21) われわれは地蔵の本願について論ずるのを中止しよう。仏教信仰の中で地蔵信仰が占める位置につ

過ぎない。神社の祭祀の費用に宛てられる神田などの他にも、地蔵の田や寺に献げられた田などについても、 細な調査が必要とされるのではないだろうか。 田と同様に「ケガレ」を嫌う田であり、韮や葱はそのために忌避されたと考えたい。だが、これはあくまでも推定に 一つの推定が成立するであろう。すなわち、「地蔵田」と称されるような供田や免田は、神田などの神社の祭祀用の 堂に献げられていた。したがって、「韮地蔵」や「ねぎを嫌う地蔵」といったテーマが持つ意義については、ここに 田 |仕事を助ける地蔵には、「地蔵田」なる名称の供田、もしくは免田があって、これが地蔵菩薩やそれを祀る寺・

えの地蔵のモチーフとなったのであろうと考えている。 地蔵の田 ない。柳田國男、中山太郎をはじめとして、諸研究者が論じているところでもある。柳田にしろ、中山太郎にしろ、 にまで泥を打ち掛ける習俗があって、本来、田植えに際して行われた「祝儀」が地蔵に泥をつける習慣となり、田植 モチーフはその祈願の形式と関連していると考えているのである。中山太郎は、田植えをする早乙女がそばを通る者 味噌を塗ったり、 地蔵の田植え」というモチーフに関する研究はことさら新しいものでもなければ、一地域に限定されたものでも |植えのモチーフについては地蔵の体に泥がついていたという点に注目している。泥を地蔵の体に塗り付けた あるいは地蔵の体を縛ったりして、祈願するという方式が広く分布しており、 地蔵の田植えの

:田は泥をつけたり、味噌を塗ったりすることで、これをきれいにするための雨を呼ぶ、雨乞いとして行われたの

仰儀礼であると論じている。すなわち、柳田はここでも、 ばならぬから雨が降るのだと、思っていた」が、これは道祖神に対する祭りでも見られたことであり、 を立てて、石に田の泥を一面に塗ります、そうするときっと降るといっており」、「恐らく泥で汚すと、 ではないかと考えている。秋田県北秋田郡北浦町野村の「寝地蔵」は「常には横にしてあって、雨乞いの時だけこれ 彼の持論である道祖神と地蔵の習合についての議論を展開 仏教以前の信 洗わなけれ

議論自体が不毛であると言わねばならない。いずれ、論議されるべき問題としても、ここでは別な視点で考えてみよ あるか否かという議論は、 仏教伝来以前に成立した儀礼が仏教的形式をとって伝承されてきたと考えているのである。 結論が明確になるとすれば重要である。しかし、仮設を前提として論じられている間 仏教以前で

民が怠ったときに、小僧となって出現し、鼻取りや田植えをしたとされ、鼻取り如来とも呼ばれているとい ら下が泥に汚れていたという。また、八王子市元子安町の極楽寺の本尊阿弥陀如来は、少しばかりの免田の耕作を農 供田が荒れたので、 中 ш 太郎の引用している資料に、 住職が祈請すると田は一面に水が湛えられていた。厨子を開いてみると、本尊である地蔵の腰か 筑後国三潴郡西牟田村大字流の正覚寺の「水引地蔵」の伝説がある。

供養の田が用意されていたのである。あるいはこの「地蔵の変身」をきっかけに供田や免田が用意されたのかも知れ に指摘したように、 いずれにしろ、相手が異なるとは言え、農民にとっては年貢を差し出すべき農地があったということである。 地蔵菩薩や阿弥陀如来が耕すのは、 福島県岩瀬郡鏡石町成田の鼻取り地蔵も、 誰の田でもない、自らの寺に施入される供田や免田であっ 矢祭町中石井の鼻取り地蔵でも寺や地蔵に施入される すで

結果として、これらの供田や免田を耕作する労働は農民の負担によったはずである。

いた。 のためであったことは明らかである。仏教寺院は荘園領主化するためにも、在地領主層を組織する論理が要求されて 供養の田や免田が地蔵菩薩に献納され、耕作された点を考慮すれば、これらの伝承が寺院の所領獲得

は農民の口に戻ってきたかも知れないからである。であるとすれば、これらの地蔵菩薩や阿弥陀如来は農民にとって、 たのかも知れない。なぜならば、これらの土地から得られる米は、地蔵菩薩や寺への供養として献げられ、 だがしかし、これらの供養の田が免田として認められていたとすると、耕作する農民達にとっては有益な土地であ 祭りに

Ⅵ 地蔵の霊験と地蔵の米の霊力

稲作の実りとそこから得られるものを直接保証してくれる存在であった。

足に泥のついた地蔵の説話が取り上げられていたのである。(8) てほしいものを」と訴えると、 蔵を信仰していたが、二反ほどの田を作男が耕してくれなかった。地蔵に向かって、「もし人間ならば、 えが終わっていて、田には鼠の足跡のようなものがあり、地蔵の足には土がついていたという。すでにこの時代から、 速水の指摘によれば、一二世紀末の『宝物集』には、地蔵を信仰していた老女の話がある。西坂本にすむ老女が地 夢に若い僧が出現して、田植えをする旨を告げた。翌朝田を見ると、 一夜の内に田 田植えをし

田は 『地蔵菩薩霊験記』から次のような逸話を紹介している。「出雲の大社の農夫が信心していた地蔵様は、

154

ました」、翌日農夫が「厨子の戸を開けて見ると」、「地蔵様が盃をかぶって、足は泥だらけになって立っておられた」 感心して、食事の時に盃を一つやりました。喜んで酒を飲んで、その盃を頭の上にかぶり、後にどこかへ帰って行き 七八の青年に化けて、その農夫が病気の時に、代りに出て来て、お社の田で働いた」。「あまりよく働くので奉行が

料の中で、 な地蔵の利益は、知り得る限りでも、古代末期から中世にまでさかのぼる記録がみられるのである。これらの記録資 いずれの説話でも、田の持ち主や田で働く者達にとって、地蔵はありがたい救済者として出現している。このよう もっとも注意を惹くのは『伯耆国大山寺縁起』や『大山寺縁起』に見られる、地蔵菩薩出現の逸話であろ

た。訪ねて行くと、古い寺のそばに「柴の庵」があって、一人の僧がいた。 に参って、「生身の地蔵」に会いたいと念じていた。すると、夢の中で下野の岩船に行けば会えるとのお告げがあっ すなわち、 備後の国の神石に地位の低い僧侶がいた。地蔵菩薩に帰依していて、地蔵権現の霊地である伯耆の大山

こしている所もあって、 と、その僧侶がある田では鼓を打って囃しており、またある里では早苗を運んでいた。また、牛の鼻を取って田を起 取りや田植えの苗運びなどの手伝いを頼んで行った。一人きりなのにどうするのかと心配して、翌日様子を見に行く 夜の宿を借りるつもりでその庵に泊まると、夜になって訪ねてくる者があり、「地蔵坊」と呼びかけては牛の鼻 同じ僧侶があちこちで働いていた。訪ねてきた修行僧は、これこそ地蔵が「化現」なさった

夜になって戻ってきた庵の僧侶に、 自分が訪ねてきた理由を話すと、 伯耆の大山にこそ地蔵菩薩がいらっしゃるの

出会った僧侶が元から居たかのごとく権現の前に現れた。不思議なことだと思っていると、夢のように、その僧侶 貰うと、この米は釜に一杯に炊きあがった。伯耆の大山に戻って大山権現にお参りすると、そこには、まるで下野で だからと、大山に帰ることを勧められた。宿の僧に与えられた米を持って大山に向かったが、途中の宿で米を炊いて

見られるものであり、それらによれば、下野の岩船山に登った僧侶は、 目撃するという筋になっている。しかし、『地蔵菩薩霊験記』では、後にこの山を訪ねた者は庵も見つけられず、 いささか、逸話の紹介が長くなってしまったが、以上のような展開である。この説話は『地蔵菩薩霊験記』 庵の住僧が山頂で地蔵菩薩に姿を変えるのを

の者達も何も知らなかったという結末で終っている。 (ヨ) し、これらの縁起では、「地蔵菩薩像」は足を泥まみれにしては現れてこない。つまり、庶民のために働くとは言え、 しかし、 一いずれにしても地蔵の変身、もしくは分身が農夫らのために、こころよく田や畑に出て働いている。

「岩船地蔵」は、この『大山寺縁起』や『地蔵菩薩霊験記』の記述をどう受けとめたのであろうか。岩船 山では、

庶民の生活のレベルまでは降りてきていないのである。

蔵に出会ったものとしている。また、仮名本は全五巻の縁起であるが、第1巻では神代以来の山の由来を説明し、第 薩縁起」(全五巻)の存在が知られている。真名本では、大山の練行の僧侶が宝亀年間に岩船山を訪れて、 寛文十年(一六七○)付けの真名本「下野州岩船山縁起」、及び延享元年(一七四四)付けの仮名本「岩船山地蔵菩

二巻で大山からの僧侶の来訪と地蔵の出現を物語っている。(※ 仮名本『岩船山地蔵菩薩縁起』では、 大山の僧侶弘誓坊明願が地蔵の変身を見た僧侶ということになる。大山の弘

を知っている。 誓坊は生身の地蔵を拝したいと考えて、筑紫の竈戸山を訪れた。さらに、 山に向から。草庵に住まう伊賀坊は訪ねてきた明願の話しを聞いて、自分だけが地蔵の影向が出現するの 毎月十八日と二十四日には地蔵菩薩が出現するので、 しばらく滞在するようにと勧める。 明願は竈戸山の宝満大士の教えによって、

なって出現した。伊賀坊自身が地蔵の変身した姿であり、民衆の救済のために現世に出現したのである。 の上に立つと東方に向かって、左右の手で自分の体を引き分けるようにしたかと思う間に、 さらに、その僧は地蔵の出現を予告して弘誓坊をつれて山上に登った。そして、自分は山の背後に廻り、 伊賀坊は村人の求めに応じて、牛の鼻綱を取り、屋根の萱を切り、あるいは柱を削って働くという霊験を示した。 自らが金色の地蔵菩薩と 船に似た岩

中に「自然湧出」の「地蔵尊」のあることを知らされる。これを本尊として建立されたのが岩船地蔵であるとい た者にはその米が「仏舎利」となって出現した。大山に帰りついた弘誓坊は、 もなく主の法師の姿もなかった。しかし、 伊賀坊に与えられた米を持って弘誓坊は大山に帰る。途中で、この米を炊かせると釜に一杯になり、 老翁の教えによって、 向かい側の山の古い松の下にお堂があること、その 再び岩船山に向からが、そこには草庵

いのだろうか。つまりここでは、米は「地蔵菩薩」によって「祝福された米」なのである。 升ほどであったが、 その米は仏舎利となり、 一合ばかりを宿で炊かせると大釜に一杯になる。さらに、多くの人に配っても余るほどあると 飯粒からは光を放つともいう。 なぜ、 岩船山の縁起では、 米はただの米ではな

この岩船地蔵の縁起の中で注目しておきたいのは、弘蓍坊が与えられた米の持つ霊力の問題である。贈られた米は

その最初に掲げられているのが「地蔵田」の伝説である。 仮名本「岩船山地蔵菩薩縁起」の第三巻以降は、 岩船地蔵への庶民の信仰を物語るモチーフが多く集められている。

穀成熟せる事幾としか、農民安堵のおもひをなす、これによりて毎年正月四日の夜御堂にて護摩修行の上、民家 ねぬるよし、田のぬしは若葉惣右衛門と云ものなり、此跡本尊の擁護し給ふにや、毎年耕作水旱の障もなく、五 伝ふとかや、それより後地をわけて一反四畝一おさとやらんにて畔境を立侍れとも、 するものゝ助力とならせたまふ、さりなから田面のひろさ四反歩一つかねとて、菩薩の艱難なされたるよりいひ 当国下高嶋村に地蔵田といへる田あり、むかしいつ頃といふ事はしらす、地蔵尊牛の鼻綱をとり給ひて、耕作 明年の正月返納する事常例となりぬ(34 不思議にくろさかひ立ちか

種かしをいたし、

のである。つまり、この種子は豊作をもたらす、「地蔵の田」の種子なのである。(※) たらしてくれた。そこで、毎年正月四日には護摩修行の祈祷をした上で、人々に種子を貸し与えて、翌年正月に返す 鼻取りをしてくれた田は、土地を細かく分けようとしても畔境を作ることはできず、その後は毎年、 村の地蔵田」の逸話でも生きていた。というよりも、この話と結合することで意味を明確にし得るであろう。 弘誓坊の与えられた米の霊力は、人々に豊かに分け与えられる「生産力」であった。そのモチーフはこの 五穀の豊饒をも 下高嶋 地蔵が

かも知れない。いずれにしろ、伯耆大山と岩船地蔵をつなぐ古代・中世仏教が、稲作技術と地蔵信仰を結び付けてい て代掻きを手伝う。ここでは、 変えて出現し、共に泥まみれになって田で働く神である。岩船山の伊賀坊という地蔵菩薩の化身は、牛の鼻綱をとっ 大山供養田植えの場面で勧請される、伯耆大山の智明菩薩を思い浮かべる必要がある

地蔵はとりもなおさず豊作を人々にもたらす「豊饒の神」であった。それも、わざわざ人々の前に姿を

してくれる仲間であり、「堕地獄」の苦しみからの救済よりも、 たのである。あるいはまた、直接米の増産をもたらす地蔵の「種籾」を与えてくれる神であった。 地蔵菩薩は六道を巡って人々を救済する存在であるが、その地蔵菩薩に民衆が期待したのは、 より現実的な豊饒の恵みを与えてくれる働き手であ 共に大地を耕

ではないだろうか。 これら稲作と関わる伝承と地蔵信仰の関わり、ひいては稲作と仏教の展開についても調査の前提とする必要があるの られた」という。また、『大山寺縁起』には、「地蔵が田植女になって、田楽を奏するありさまがえがかれ」ていると であろう。一五世紀はじめの貴族の日記「看聞御記」 ているようにも思える。 さらに、ここで考えなければならないのは、速水 福島県東白川郡の八溝山をとりまく地域には、 山岳修行を行った僧侶・修験によって稲作技術が伝えられ、 田植神事や田楽が分布しており、 には、「霊験ある地蔵に、田植に模した風流のだしものが捧げ 侑が『地蔵信仰』で指摘する「地蔵の田植え」に関する諸史料 鼻取り地蔵の伝承と重なりあ 稲の種子が配られたとすれば、

世での平安を求める浄土信仰の側面と対立しながら、 を願う現世利益的信仰へと吸収されていった。民衆の間では、これが独特な地獄観を形成していくのであるが、また 信仰は本来的に来世信仰的傾向を有しながら、 方では地蔵菩薩による現世での救済をもたらす信仰をも展開させていったのである。 鼻取り地蔵の主題は古代から中世にかけての仏教史のテーマと関わっている。 古代末期の貴族社会では、 日本の民俗仏教を形成してきた。 地獄の苦難を免れ、病気や貧窮からの救済 速水が指摘するように、

仏教信仰の現世利益的な側面

このような地蔵信仰の民衆への定着の基盤となったのが、伯耆大山の山岳修行者による、 地蔵信仰の地方社会への

薩の出現する場所が辺境の地であることの理由は何であったのだろうか。 布教を重視している。伯者大山の修行者は、なぜ、筑紫や下野に旅して、地蔵の出現を求めたのであろうか。(第) 展開であった。 田中久夫は愛宕の地蔵信仰をも、 伯耆大山の影響と考えていて、 大山の山岳修行者による地蔵信仰の

岩船地蔵は一般的な存在となっていたのである。したがって、東北地方の地蔵信仰の展開の中では、下野岩船山の持 ことの方が重要であろう。矢祭町の念仏和讃の中に岩船地蔵を歌いこんだものがある。念仏和讃に取り込まれるほど、 しかし、ここではその理由を問うよりは、 岩船地蔵が福島県の東南部の地蔵信仰に与えた意味を明らかにしておく

つ意味は大きかったと考えられる。

り地蔵の全国的な伝播を論ずる場合には、これらの山岳修行者の拠点を中心とした展開について明確にする必要があ らの伝承の相互関係が明らかにされれば、 もちろん、ここでは直接の関連が、 岩船地蔵と鼻取り地蔵の伝承との間にあったとは断言できない。しかし、 東北地方への地蔵信仰の伝播はより明確にされるはずである。今後

るだろう。

蔵 か、 に思われる。さらにまた、豊かな結果をもたらす種籾を地蔵の媒介によって与えられていたかのようにもとれる伝承 の縁起と福島県に分布する地蔵の田仕事の伝承との関係はその典型的な事例と言えよう。 いずれにしろ、 古代以来の説話にあり、それらのモチーフが地蔵の田仕事の伝承に影響を与えていたことも推定できる。 鼻取り地蔵の伝承は東北地方への稲作の地域的展開と定着の中で、重要な役割を果たしていたよう

VII おわりに

以上に論じてきたことから、我々が地蔵の田仕事の伝承について確認できるのは、次に列記する事柄である。

1 地蔵の田仕事の伝承を成立させ、保持してきたのは小規模な湧水田を開発した「家」と考えられ、このような

「家」には守護者(としての地蔵)があったとされた。

- 2 界の霊力を体現する河童の助力が水田開発の支えと考えられるが、それが地蔵の鼻取り伝承に置き換えられた。 地蔵の田仕事と河童の田仕事との両伝承には構造的類似があり、 地蔵と河童は置換可能な要素となっている。水
- 3 地蔵の鼻取りという伝承には、農耕技術としての代掻きや馬の統御が取り込まれていて、農耕の発達を促す性格 が含まれていた。ことに、馬の産地としての東北地方にとってはより有効な技術をもたらしていた。
- 4 地蔵菩薩は田仕事を手伝った結果として供養田や免田を得る。この伝承は仏教寺院による、所領としての田地獲 得の過程で広まったと考えられる。 しかし、それと同時にこれらの田は、 民衆が直接稲(米)を得る手段として

保持され、その収穫は自らに還元される。

5 福島県東白川郡一帯に広がった鼻取り地蔵の伝承は、 慮する必要がある。『地蔵菩薩霊験記』記載の岩船地蔵の説話でも、地蔵は変身して田仕事を手伝らものとして 岩船地蔵の縁起との関係、さらには伯耆大山との関係を考

描かれている。

6 また、岩船山の地蔵によって与えられた米は特殊な霊力を持っている。この伝承の故に、岩船山は稲の種籾を農

民に貸し与えていた。

7 る これらの論証から、鼻取り地蔵の伝承の背後には、 稲作の推進者としての山岳修行の仏教寺院の存在が見てとれ

ていたとも言える。 交換による稲の品種改良や農耕技術の改良とともに、稲作農耕の発展を示すものであり、地蔵信仰がこれらを媒介し いう農耕技術が仏教寺院の関与によって取り入れられた過程を示しているようにもとれる。これらの技術は、 「家」のあり方と、仏教の展開の関与が考えられる。ことに、馬の鼻取りによって成功する、 以上見てきた通り、鼻取り地蔵の伝承の背後には東北地方への稲作の展開、とくに、小規模の開発を進めてきた 代掻きと馬鍬の使用と 種籾

広範な調査・分析と、これら農耕技術自体の変遷に関する調査・研究を含めて、今後の課題としておかなければなら 取り込まれたのである。これを明らかにするには、山岳仏教寺院を中心とした田遊びや御田行事などの儀礼や芸能の のあり方を考える必要があると考えられる。 とりわけ、農耕技術としての代掻きと農具としての馬鍬の定着は、どのような理由からか「鼻取り地蔵」の伝承に ことに、古代末期から中世にかけて各地に所領を獲得した仏教寺院の勧農政策との関連での仏教文化

- (1)『柳田國男全集二五』(ちくま文庫、二八八頁~三○四頁参照)、いわき市長友の長隆寺に伝わる伝説や、福島市腰ノ浜の鼻取 蔵の伝承を道祖神の伝承と対比させながら、神への祈願としてこのような方法があった事を論じ、仏教以前の信仰の残存であ 庵の伝説、さらに神奈川県・東京都・静岡県・宮城県の伝説が取り上げられている。柳田は泥をつけられる地蔵や縛られる地
- (2)『棚倉史談』第二号(七四頁)、『ふるさとの民話と伝説』第三集(三~五頁)等参照
- (3)地蔵に泥をつけたり、味噌を塗ったりする習俗が広くみられる事を、柳田國男が指摘している。また、そのことと雨乞いと が密接な関連を持っていたようである(注1参照)。
- (4)「韮地蔵」『東白地方の民話』(棚倉高校編集、『棚倉の民話と伝説』に再録)、『ふるさとの民話と伝説』第四集(八~一○頁) 参照、「河童の田仕事」のモチーフを考えさせる展開である。
- (5)千葉徳爾「田仕事と河童」(大島建彦編『河童』、双書フォークロアの視点一、岩崎美術社、一九八八年四月、一七頁~四四 初出『信濃』一〇巻一号、昭和二四年
- (6)石川純一郎『新版河童の世界』(時事通信社、昭和六○年)でも、多くの類話が取り上げられている。とくに、河童への供物 が石川県能登半島の田の神への供物と共通していることを指摘している点は示唆的である。
- (7)本家を中心とする「同族団」が第二次世界大戦の開始まで、広く東北地方にみられた事と、これらの伝承は無関係ではない ついてのさまざまな報告がある(『近世日本農業の構造』、東京大学出版会、昭和三二年)。 巻〜第三巻』未来社)。また、 と思われる。有賀喜左衛門その他の同族団論争や名子制度と称する従属家族の問題を参照されたい(『有賀喜左衛門著作集第 中部山岳地帯では、古島敏雄による「御館・被官制度」や「譜代」と呼ばれる隷属農民の問題に
- (8)柳田國男「河童駒引」(『山島民譚集一』、定本柳田國男集第二七巻所収)、石田英一郎『河童駒引考』(『石田英一郎全集第 フォークロアの視点一、岩崎美術社、一九八八年四月 五巻』所収)、小島瓔磯『人・馬・他界-馬をめぐる民族自然誌-』(東京書籍、一九九一年一月)、大島建彦編『河童』

- (9)『棚倉の民話と伝説』(棚倉町教育委員会、昭和五四年)、僧侶によって編纂された史料のため、かなり潤色が施されている。 弘法大師や鎌倉権五郎景政などの名称はそれを示していよう。
- (10) 『ふるさとのむかし話』 (鮫川村歴史民俗資料館、 昭和五八年
- (11)佐藤孝徳編著『昔あったんだっち』(磐城七浜昔ばなし三○○話、昭和六二年、いわき地域学会、六○~六二頁 (12)この資料は吉田博令先生の平成二年一○月三日の調査によります。明記して感謝いたします。また、調査記録によれば、北
- 向き地蔵とも呼ばれる地蔵が古道の道標として安置してあったようであり、福島市の旧市内にも同名の地蔵がある。 おきたい。さらに、この代掻き地蔵のお堂の上方には長者平と呼ぶ屋敷跡らしきものがあり、焼けた籾などが出るという点に
- (3)『清水町誌史料編』(清水町誌編集委員会、昭和五七年九月、八四四頁~八八○頁)、この他にも「田遊び」の中には、 牛が登

も興味を惹かれる。

- (14)牛尾三千夫『大田植の習俗と田植歌』(名著出版、昭和六一年六月、二三六頁)、市川健夫『日本の馬と牛』(東京書籍: 五六年一○月、一九六頁)、馬による代掻きの起源や変遷についての研究は充分には行われていないようである
- (15)『地方凡例録』九下用水之事(『古事類苑産業部一』、吉川弘文館、昭和五五年二月、四九頁所載)
- (16) 『写真でみる日本生活図引ーたがやす』(弘文堂、一九八九年一月、一八頁~一九頁

(17)工楽善通『水田の考古学』(東京大学出版会、一九九一年一○月、一一二頁~一一五頁

- (18)農林水産技術会議事務局編『写真でみる農具民具』(農林統計協会、昭和六三年六月、六三頁~六四頁
- (9)大蔵永常『農具便利論』(農山漁村文化協会、『日本農書全集一五』、昭和五二年一○月、二○三頁~二○四頁
- (20)牛尾『大田植の習俗と田植歌』(二三四頁~二三五頁)、後述するが、岩船地蔵の化身である僧侶もまた牛の鼻綱を引いて農 耕を助けるモチーフが伝えられている。
- (21)『鏡石の民話』(鏡石町教育委員会、平成二年三月、二六頁~二八頁)
- (22)『福島の民俗Ⅱ』(福島市史別巻Ⅳ、福島市史編纂委員会、昭和五五年三月、四二五頁~六頁)参照、生き埋めにされて苦し

- られている。 葉を借りて言えば、「五老内町」は御霊信仰の「五郎」であろうか、棚倉町の事例も「鎌倉権五郎景政」の名前と結びついて語 んだ僧侶が、首を切って貰い、地蔵に祀られた話や、他の事例に近い鼻取り地蔵の伝説なども報告されている。 柳田國男の言
- (23)『今昔物語集』に見られる説話で、後にいろいろの説話集に再録される「矢取り地蔵」は地蔵が身代わりとなる説話の代表的 なものである
- (24)速水侑『地蔵信仰』(塙新書、一九八一年一一月)では「地蔵信仰の民衆的展開」の項で、地蔵の田植えについて論じている。 世利益化を進められたと評価されている。 速水によれば、中世浄土教の確立によって、地蔵信仰を含む諸信仰は現世利益の枠の中に狭められたものであり、いっそう現
- る水引地蔵のモチーフを重視している。

(25) 中山太郎「田植地蔵」(同『日本民俗学』二、大和書房、昭和五二年二月、一七五頁~一八七頁)、中山は、また各地に伝わ

- (26)柳田『日本の伝説』(二九八頁~三○二頁)参照、「寝地蔵」については、菅江真澄の資料によっている。
- (27) 中山「田植地蔵」(一八一頁) (28) 速水『地蔵信仰』 (一二九頁

柳田『日本の伝説』(二九二頁)

- (30)「大山寺縁起」一七(五来重編『修験道史料集Ⅱ』、名著出版、昭和五九年一二月、三二一頁~三二二頁)による。『伯者国大 山寺縁起』(『続群書類従』第二八輯上所収)では記述はもっと簡単である。
- (31)根津美術館蔵「地蔵菩薩霊験記絵」や「地蔵菩薩霊験絵詞」などによる。これらの史料では、主人公の僧侶の名前などは出 てこない。つまり、一地方の伝承に過ぎない扱いがなされているのであろう。
- 栃木県郷土文学研究会「翻刻岩船山地蔵菩薩縁起」(栃高教国語部会『国語』一四号、昭和四九年、細谷藤策翻刻担当) によ
- 同上一岩船山地蔵菩薩縁起」(二九頁~三二頁)

- 同上「岩船山地蔵菩薩縁起」(三三頁)
- る種籾でもあったといえよう。 明らかにこれは「利稲」であり、祠堂銭同様に寺の経済活動として重要である。しかし、同時に民衆にとっては、霊力のあ
- (36) 牛尾『大田植の習俗と田植歌』(二二六頁~二四五頁参照)。
- (37) 速水『地蔵信仰』(一二九頁)
- 蔵信仰』、雄山閣、昭和五八年に収録)参照 速水侑「日本古代貴族社会における地蔵信仰の展開」(『北海道大学文学部紀要』一七-一、昭和四四年、桜井徳太郎編『地
- 田中久夫「地蔵信仰の伝播者の問題-『沙石集』『今昔物語集』の世界-」(『日本民俗学』八二号、昭和四七年、二〇頁~
- (40)拙稿「矢祭町念仏和讃資料」(『東京立正女子短期大学紀要』第一五号、一九八七)、光明真言と十三仏から始められるが、 和讃の二番目に記録されるほど一般的である。
- 41) 本稿は、 会についての見解を加えた点である。 と今回の文章との差は、 ことにしたものである。再録を許可してくれた同人に感謝すると共に、大方のご批判をお願いするものである。既発表の文章 改訂補筆したものである。十分な資料の検索をすませていないので、不満足なままの部分もあるが、とりあえず再度発表する 一度矢祭町民俗調査団関係者で発行している同人誌『じねんじょ』に掲載したものに再検討を加え、 農耕技術に関する伝承という観点を加えたことと、河童伝承との比較によって伝承の基盤としての社 大幅に内容を
- します。また、岩船地蔵については、都留文科大学の中野猛先生に多くの資料をご教示いただきました。 奥久慈文化研究会」での発表を踏まえて、まとめたものである。片野先生をはじめ、当日の討議での貴重な意見に感謝いた 本稿の執筆にあたっては、吉田博令先生及び菊池健策氏から多くの資料を提供していただいた。また、本稿は矢祭町での

日蓮聖人「十一通御書」の考察

西堀 哲教 夫 通

脇

第一章 真偽論

序

鎌倉幕府の要人並びに建長寺住職道隆等鎌倉仏教界の有力者ら、合計十一人に送ったとされる書翰のことである。 同年正月、日本の入貢を促す蒙古の国書が太宰府に到着した。幕府の報告にもとづいて対応を協議した京都の朝廷 十一通御書(以下「本書」と略称)とは文永五年(一二六八年)十月、日蓮聖人(以下敬称略)が執権北条時宗等

えて西国御家人らに臨戦態勢の準備を命じている。

方日蓮には、

は、蒙古の要請を拒絶することに決定、伊勢神宮などに神助の祈願を始めた。幕府は朝議決定以前に蒙古の入寇に備

場合によっては兵力の使用もやむを得ないという蒙古国書の到来が八年前の文応元年(一二六○年)

192

される最信宛の手紙(「宿屋入道許御状」)については、眞蹟は発見されておらず、その信憑性を疑ら向きもある。 そこで日蓮は同年四月五日、 幕府の実力者北条時頼に提出した『立正安国論』で予言した他国侵逼の難の適中以外の何ものでもないと思われた。 かし同年九月発送と信じられる「宿屋入道再御状」(眞蹟断片)から、八月にも最信に手紙を書いたことは事実のよ に取り次ぐことを依頼した。 日蓮は同年八月と九月の二回にわたり、得宗被官宿屋左衛門入道最信に手紙を書き、「御勘由来」の趣旨を執権時宗 指摘し、念佛・禅の「邪教」による祈祷を止めて、法華の正法に帰すべきであると提言している(「安国論御勘由来」)。 これに対し法鑑房又は幕府が何らかの処置をとったという証拠はない。恐らく無視されたものと思われる。そこで しかし最信もこの依頼に応じなかった。 前の得宗家家臣と考えられる法鑑房に書を呈し、『立正安国論』における予言の適中を もっとも文永五年八月二十一日付けで送ったと

門頼綱、北条弥源太、建長寺道隆、 は大同小異、予言の適中を指摘し、 斉に送ったとされている。 そこで日蓮は同年十月十一日、 この手紙が宛てられたのは執権時宗、 十一通御書と称される十一通の手紙を書き、 極栄寺良観、大仏殿別当、寿福寺、浄光明寺、多宝寺、長楽寺であり、その内容 諸大寺に対して公場対決を迫ったものとなっている。 執権の家臣宿屋入道、 政界並びに仏教界の有力者ら十一人に 執権 (得宗) 家家司平左衛

二、偽書説

本書については早くから近代史学者らによる偽書説が出されている。 姉崎正治の「十一通書状から竜の口

五二年)で偽書説をとり、 通御書の研究」(『日蓮教学の研究』京都、 『大崎学報』五九号、大正十年)、市村其三郎の「元寇と日蓮」(『歴史地理』五四号、昭和四年)、浅井要鱗「十一 その思想・行動と蒙古襲來』(東京、清水書院、 (「金吾殿御返事」)や、建治元年(一二七五年)執筆の『撰時抄』などをよりどころにして作り上げられたもの(註) 本書は文永六年に書かれたと考えられる十一月二十八日という日付けのある四条金吾宛て 平楽寺書店、 昭和四六年)、 昭和二〇年)などであるが、最近の史学者川添昭二も『日 『蒙古襲來研究史論』(東京、 雄山 閣 出 昭和

的に本書の弱点は眞蹟が発見されておらず、又眞撰であることを証拠だてるような確かな根拠もない事である。 さてこれらの偽書説は文献論的考察、 本書に触 れているのは 「種々御振舞御書」と「弟子担那中御書」だけであるが、 語句・日付けの問題、 思想的考察、 文章論に分類する事が出來よう。 両書とも偽書論が絶えない。

最初に触れたのは日蓮の滅後約二百年に出來た啓運日澄の『日蓮聖人註画讃』であった。しかしこの『註 日蓮滅後約二百年間、 年)京都本満寺の日重が編纂した『本満寺御書』第一巻に十一通御書の全文がはじめて載せられた。 滅後数百年を経て始めて現れたもので、文献学上疑わしいと言わざるを得ないと偽書論者が主張する. 出典を示さないので文献的價値を認める事が出來ないという。 門下の記録や傳記などで、蒙古牒状や龍口法難にふれながらも本書に言及したものがなかった。 その後約一世紀を経て文禄四年 即 いち本書 画讃』は 五九五 は日蓮

頼綱、 道隆、 - 良観に宛てられた書状に執権を指して「鎌倉殿」と称している。これにつ いて中

じ呼称を用いたところがあるが、 史家の川 添は 「当時の一般的史料 それは何れも確実な御書ではないと浅井が主張している。 からそのような表現はありえない」と言明してい る。 日蓮 また宿屋入道 の遺文中、 この外にも同

弥

日」と間違えたとは信じ難いと指摘されている。

七年(一二七〇年)になると「善無畏三藏抄」「天台眞言勝劣事」「法門可被申之事」などで、 ている。恐らく日蒙関係の緊張と共に朝廷・幕府から調伏の祈祷を依頼された眞言密教の隆昌に刺戟されて、 の対象は専ら念佛宗であったが、文永五年四月の「安国論御勘由来」でも眞言宗は批判されていない。ところが文永 箇寺も含まれていない事からも、 かれたはずの本書に眞言排撃論が含まれているのはおかしい。本書が宛てられたという十一箇所の中に眞言寺院が一 書状に見える眞言排撃論について、姉崎や市村は日蓮が眞言宗の批判を開始したのは文永七年であり、 思想的に文永五年の日蓮ものとは考えられないものが本書に含まれているとも指摘されている。第一に道隆宛ての これは明白であると主張している。周知の如く『立正安国論』における日蓮の批判 日蓮は眞言宗を非難し 文永五年に書 日蓮の

蒙古に対する態度は、 あろうと言う蒙古佛使論である。従って真の佛の教えである『法華経』の行者を自任する日蓮が、 らず」と言明したとは信じられないと浅井が主張する。 又この頃日蓮が自ら「蒙古国退治の大将たり」とか「彼は3) もし日本政府が邪宗の信仰を改めないならば、佛使が外敵となって來寇し、 『撰時抄』や (蒙古国) 『報恩抄』 を調伏せられんこと日蓮にあらざれば叶うべか のような眞蹟遺文に見られる日蓮の 日本人の先頭に立 日本を攻め亡すで

眞言宗に対する態度が急変したものであろうと市村が推測している。

って蒙古を撃退しようと誓うことはあり得ないと言うものである。

曉には一言も觸れていないのが理解出来ないとする。 に『子に三度の高名あり』と言って『立正安国論』の献上と平頼綱に対する二度の諫言を挙げながら、本書による諫 で、あらたまって漢文で書かれたと考えられない事もない。もしそうだとすると、その数年後に書かれた『撰時抄』 になっていることに対して疑問を提出する。時宗、頼綱など政府の当事者らにも送られた公文書的な手紙であったの 最後の文章論は主として浅井の説である。浅井は先ず、日蓮の消息文は大てい仮名混り文であるのに本書は漢文体

がないと評している。 ば日蓮をおいて之を叶うべからず。早く我慢を倒して日蓮に帰すべし」などは、日蓮の文章としてはあまりにも風格 又浅井は「長老忍性、速かに嘲弄の心を翻えし早く日蓮房に帰せしめ給え」や「すみやかに退治を加え給え。(誰も)

て所謂四箇格言が成立したと考えられている。とすると「与道隆書」中の四句は偽造と言わざるを得ないことになる。 あり、四句の順序も所謂四箇格言とは同一でない。それが日蓮の滅後、講釈師らによって洗練され、順序も変えられ 初である。但しこれは「眞言は国をほろぼす。念佛は無間地獄・禅は天魔の所為・律は国賊」という仮名まじり文で 指摘する。日蓮の眞蹟遺文中、四箇格言の形式がととのっているのは弘安三年(一二八〇年)の「諫曉八幡抄」が最 法、律宗国賊妄説」は後世の所謂四箇格言「念佛無間、禅天魔、眞言亡国、律国賊」に酷似した成句になっていると 又浅井は本書中、「与建長寺道隆書」に見られる他宗排撃の四句「念佛者無間地獄業、禅宗天魔所為、 真言亡国悪

三、眞撰論

る。従って本書は眞偽未定とみなされているのであろう。そこで先学の意見を参考に、偽書論に対する反論をまとめ 察される。この正篇には眞蹟遺文、眞撰確実なるものの外に眞偽確定せざるも宗義の信仰上重要なものも含まれてい 立正大学日蓮教学研究所が總力を挙げて編纂した『昭和定本日蓮聖人遺文』正篇に本書が含まれていることからも推 これらの偽書論に対して、組織的な反論は見当らない。しかし偽書論が受け容れられたわけでもないことは、 戦後

て見る

到着している。そこで十一月頃再び各所に手紙を書いたところ、今度は少々反応があった。日蓮の言うことを「そう た」というのは文永五年十月の本書のことであろう。今年即ち文永六年には三月と九月の二回にわたり蒙古の使者が たの人の心もやわらぎて、さもやとをぼしたりげに候。」とある。「去年あちらこちらに手紙を出したが返事がなかっ 又は陰蔽したからであるとも考えられる。文永六年(一二六九年)のものと推定される「金吾殿御返事」に「去年方 集にも本書が含まれていないのは、法敵の迫害を恐れた日蓮滅後の門下が保身のために、本書並びに関係記事を抹殺 て身延山に存在したとされている。日蓮の弟子や門下の記録等に本書に触れたものがなく、本満寺本以外の古い遺文 は出来ないと言えよう。又信頼出来る古記録等に直接本書に触れたのものがないと言うが、「種々御振舞御書」は嘗 眞蹟が現存しないということについて、七百年以前の記録が現存しないからといって直ちにその信憑性を疑うこと 申し候しかども、 いなせの返事候はず候。今年十一月の比、方々へ申て候へば、少々返事あるかたも候。 をほ

たはそれに似た手紙の存在は否定出来ないようだ。 かも知れない」と思うようになったからだろうと言う意味だろう。この手紙(眞蹟遺文)から所謂『十一通御書』ま

実でない」と考える遺文のうち、「王舎城事」は眞蹟が曽て身延に存在したとされており、 :権を指して鎌倉殿と呼ぶ用例は日蓮の「確実なる」御書には見られないと浅井が主張しているが、浅井が、「確

国論』を時頼に提出したとある。筆写の際における欠落又は誤写の可能性を考慮に入れれば、日付けの違いをもって ようなことは一度もなかったと主張しているが、文永五年の「安国論副状」には正元二年 は眞蹟が中山法華経寺に現存する。第二人称敬語として「貴辺」でなく「貴殿」が数箇所に使われていることについ 転写の際の誤りと考えられないこともないだろう。しかしこれは眞蹟が発見されない限り確めようのない問題で 日付けの問題に関して姉崎は「(日蓮)上人は特に年号の用い方に厳格で」文応元年と正元二年とを間違える (正確には文応元年)『安 又「富城入道殿御返事」

偽書と断定するのは行き過ぎであろう。

年の作とされている。又当時の鎌倉寺院は三宗又は四宗兼学が普通で、市村が代表的眞言寺院として挙げている鶴岡 るもののうち、 まれていないという二点である。しかし日蓮の眞言排斥論が最初に見られる文永七年の遺文として姉崎、 氷七年以前の遺文には(本書を除いて)眞言を排斥したものがないということと、本書の宛て先きに眞言宗寺院が含 思想的考察。本書の書かれた文永五年の時点では日蓮が眞言宗の排撃をしていないはずだという主張の根拠は、 「法門可被申之事」以外は眞蹟が見つかっておらず、その唯一の眞蹟遺文も古来文永七年でなく、六 寺門系、山門系、東寺系の僧侶が混在しており、宗旨を云々することは無意味であったらし 市村が挙げ 文

t 186 従って日蓮が眞言排撃に踏み切ったのは本書を書いた文永五年の終り頃と言えない事もない。

逼の難は換言すれば仏使侵寇論であり、日蓮の態度は佐渡流罪前後に一貫性がある。従って十一通御書に見られる日 流罪によってその望みが絶えてしまった後は蒙古仏使論に変ったと言う見方もある。しかし『立正安国論』 摘している。 本書に見られる日蓮の蒙古国に対する態度と『撰時抄』『報恩抄』などの眞撰遺文に見られる蒙古佛使論の矛盾に 日蓮の警告的態度が国家の危急存亡の機に際して、愛国者的に変ったに過ぎないと言う者もあると浅 一方、文永八年佐渡流罪以前の日蓮は国師採用の望みを持っていたので愛国論者的言辞を弄していたが、 の他国

動を続けていたのであり、『立正安国論』の呈上、頼綱との殿中問答のような一時的な出来事でなかったからである 由について姉崎は、 後に文章論に移る。 蒙古牒状の到着以来約二年間 本書は公文書のように漢文体で書かれながら、 (文永五-六年)日蓮は鎌倉にあって絶えず手紙などによる諌曉活 他の遺文中特に取り立てて記されていない理

蓮の愛国者的言辞には疑問が残る。

蓮滅後の講釈師らが「与建長寺道隆書」を参考にして、所謂四箇格言を作り上げたという可能性も全くないわけでは 箇格言に似た「与建長寺道隆書」に見られる四句は後人の偽作であるという議論も、文永五年の時点においては日蓮 っているのは古今問題となった御書に多く見られる所である」からと言って、 はまだ眞言批判を始めていなかったという確かな証拠がない限り、主観論に過ぎないようである。「一定の成 次に日蓮の文章としては風格の欠けた部分があるという議論は、 前述した如く、 文永五年に日蓮は眞言批判を始めていなかったという確定的証拠はないようだから、 具体性の欠けた主観論のように思われる。 十一通御書は偽書であると断定 また四 には出来 句にな H

ただしその手紙は現存する十一通御書と同一であったかどうか疑わしい。換言すれば本書が日蓮の眞撰と言うには疑 においてた確かなことは、蒙古国書の到来に際し、日蓮が本書に似た内容の手紙を各所に送ったことは事実であろう。 わしい点があるが、それが偽書であると断定出来るような確たる根拠もないということである。 以上、 本書の眞偽論を文献論的考察、語句・日付け問題、 思想的考察、並びに文章論に分けて考察したが、 現段階

と信ずるものである。 章と、本書の文章の文体・文法論的比較が必要であろう。それによって本書の眞偽論を一歩前進させることが出来る 格がないところがあると主張しているが、この議論に具体性を持たせる為には、日蓮の眞蹟乃至眞撰と認められる文 十一通御書の眞偽論で、議論が尽されていないと思われるのは文章論のようである。浅井は日蓮の文章としては品

堀

註

- (1) 『昭和定本日蓮聖人遺文』では文永七年としているが、姉崎、市村、川添は共に文永六年と考える。
- (2)『昭和定本日蓮聖人遺文』では文永六年となっているが、姉崎も市村も文永七年と断言する。
- 4 「与北条時宗書」原漢文。

(3)「与極楽寺良観書」原漢文。

- 5 「与極楽寺良観書」原漢文。
- (6)「与大仏殿別当書」原漢文。

- (7) 註1参照
- (8)村野宣忠『日蓮聖人と鎌倉』、貫達人・川副武胤『鎌倉廃寺事典』処々。
- (9) 戸頃重基『日蓮の思想と鎌倉仏教』四二二、四二三頁。

浅井要鱗『日蓮聖人教学の研究』(京都、平楽寺書店、昭和二〇年)。 姉崎正治「十一通書状から龍ノ口へ」(『大崎学報』五九)。 参考文献

川添昭二『日蓮 その思想・行動と蒙古襲來』(東京、清水書院、昭和四六年)。 川添昭二『蒙古襲來研究史論』(東京、雄山閣、昭和五二年)。 市村其三郎「元寇と日蓮」(『歴史地理』五四)。

村野宣忠『日蓮聖人と鎌倉』(東京、水書房、昭和五四年)。 達人、川副武胤『鎌倉廃寺事典』(横浜、有鱗堂、昭和五五年)。

立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』全四巻(身延山久遠寺、昭和二七-三四年)。

戸頃重基『日蓮の思想と鎌倉仏教』(東京、富山房、昭和四〇年)。

第二章 日蓮の文体研究の業績に照らして

徴を研究なさった片岡了氏・古瀬順一氏の分析結果と、十一通御書の分析結果とを突き合わせてみたい。 ただし、十 どをはじめとした業績の蓄積がある。ここでは、文構造・主辞の現われ方・品詞の使われ方などから日蓮の文体的特 一通御書は漢文体なので、訓読して比較しなければならない点に憾みがのこる。(ほ3) 前章でも少しくふれた通り、山上ゝ泉氏『日蓮上人の文章法研究』(『日蓮上人遺文全集講義』第二十八巻所収)な は十一通御書の文体を取り上げ、先学の研究成果に導かれつつ分析してみようと思う。日蓮上人の文章については 真偽両説のある十一通御書は、はたして日蓮聖人の著作としての特徴をどの程度持っているのであろうか。ここで

一)単文の比率が高いこと。

お二人のあげられた日蓮の文体的特徴は、次のようなものである。

- (二) 主語をはっきり示す傾向が強いこと。
- 三)品詞では、名詞の比率が高いこと。
- (四) 漢語による表現が多いこと。
- 十一通御書に漢語表現が多いのは当然として除き、(一)~(三)の特徴を有するか否かに絞って調べてみること

一、文の構造から

倒的に多いことを指摘されている。また、古瀬氏も、「転重軽受法門」・「御衣並単衣御書」など八編の遺文の文構 が簡単なものが多いことを上げておられる。具体的には、単文五一%・重文一六%・複文三三%であって、単文が圧 八・五で、親鸞のそれと比較しても短いことを統計的に証明しておられる。 短文化傾向の一因ともなっている。」と、片岡氏とほぼ同じ結論を述べておられる。更に、文節数による平均文長が 造を調査され、「この単文型の圧倒的多さは、文構造そのものの単純さを意味している。そして、これが日蓮遺文の れる。これは現代の作家の文などと比較すると、非常に短い方に属する。」とされ、その理由の一つとして、文構造 片岡氏は『開目抄』の文の長さを分析し、「日蓮の手になる文の長さは、平均約七文節から九文節であると考えら

数による平均文長とを表にすると、次のような結果となる。(ほう 次に、これらのデータと、十一通御書の文構造のデータとを照合してみよう。十一通御書の文の種類の割合と文節

作品 文構造 単文 (%) 重文 (%) 複文 (%) 平均文長

與北條時宗書

六三

一七

六·七

181

かないだろう。しかし、従	長は、両氏の指摘された数値	の比率の方が高い。古瀬氏	たい一致する。しかし、「與	十一通御書の場合、複文		平均	與長樂寺書	與多寶寺書	與浄光明寺書	與壽福寺書	與大仏殿別當書	與極楽寺良觀書	與建長寺道隆書	與北條彌源太書	與平左衞門尉頼綱書	與宿屋入道書
従来指摘された日蓮の文体の特徴から逸脱したデータではある。	個の範囲内に収まっている。 だから、	の示されたデータを見てもこうした逆転現象は、	與宿屋入道書」「與平左衞門尉頼綱書」	復文がやや多いが、やはり単文の比率は高く、		四九	四四	六四	四二	四四		五五	五八	三五	二七	三八
						六	\equiv	<u></u>	七七	\equiv	<u>:</u>	五	九	八	Ξ.	八
逸脱したデータで	、単文の比率だけで、		「與北條彌源太書」では、	両		五五	111111	=======================================	四二	三三				四七	五五	五四
はある。真蹟が残っていて、日蓮の	で、ただちに問題視するわけにはい	和文では見られなかった。ただ、平均文	書」では、単文の比率が低く、複文	氏の指摘された日蓮遺文の単文化傾向とだい	された日蓮遺文の単文化頃向とだい	せ・○	六・六	五。四四	六·四	八・四	六・〇	六•七	(佛法繁栄~六通羅漢」を一文とした。以下同じ。)七一・六	八・三	八· 一	六•四

__ ≡ 180

29 179

著作であることが確実な漢文体の消息では、どうか。宛先の異なる、「安国論御勘由来」(法鑒房宛) 「御輿振御書」

種の消息について、その文構造を調べたのが次の表である。(注6) (三位房宛) ・「門注得意鈔」(富木殿ほか二人宛)・「富木殿御返事」・「妙一尼御返事」・「大田殿許御書」の六

文構造 単文 % 重文 (%) 複文 % 平均文長

門注得意鈔 大田殿許御書 御輿振御書 安国論御勘由来 妙一尼御返事 富木殿御返事 平均 作品 六七 三五 七八 Ŧi. 二八 五. \equiv 八• 八 • 一 七.0 九 -六·五 六· 二

注得意鈔」「大田殿許御書」では、複文の比率の方が単文の比率よりも高くなっている。また、「妙一尼御返事」は、 ここでも、 応 単文化傾向は認められよう。平均文長も、八文節と和文の場合とほぼ同じ結果である。だが、「門

彼無国畏 此勅勘之身。」といった対句的な表現が多いので、重文が多いの

短い消息であるらえに、「彼国王 此卑賎。

である。こうしてみると、十一通御書の「與宿屋入道書」「與平左衞門尉頼綱書」「與北條彌源太書」の複文比率が高 いことをもって、日蓮の文体的な特徴から逸脱しているとはいえないわけである。

二、主語の現われ方から

書」などの四作品の「文脈、あるいは場面依存型文の平均割合」は一九・二%であると指摘されている。(註7) の場合は、次の表のように、極端なばらつきを見せる結果となった。 のをはっきり出して念入りに表現して行く傾向」と考えておられる。古瀬氏も、「転重軽受法門」・「御衣並単衣御 で一○乃至三○%見出だされる」とされる。また、親鸞の例などをも検討し、「日蓮の場合はむしろ、主語になるも 片岡氏は、 主語を明示しない、文脈に依存している文が、『開目抄』では約三〇%、他の消息では「各書まちまち 通御書

與平左衞門尉頼綱書 與宿屋入道書 與北條時宗書 作品 文脈依存型文 四二・九 五九・〇 六九·二

與建長寺道隆書

四三・三 三五五

與北條彌源太書

六 177

與極楽寺良觀書

六〇・〇

四五・○

與大仏殿別當書

與浄光明寺書

與壽福寺書

五〇・〇

五五·六

七一・四

八八・九

與長樂寺書 與多寶寺書

文脈依存型文が二〇%程度のものは、「與北條彌源太書」だけである。十一通御書の場合は、 片岡氏・古瀬氏のデ

タとはかけ離れた結果がでてきたわけである。「與宿屋入道書」「與多寶寺書」「與長樂寺書」は、

特に文脈依存型

文の比率が極端に高いといえよう。十一通御書が、明確な意図のもとに書かれた消息であることや、漢文で書かれて

取り上げた「安国論御勘由来」・「御輿振御書」・「門注得意鈔」以下の六種の消息について、文脈依存型の文がど いること、短い消息が多いことなどが影響を与えているのかも知れない。真蹟が残っているものでは、どうか。前に

作品

文脈依存型文(%)

の程度見られるかを調べると、次のような結果となった。

御輿振御書

安国論御勘由来

四〇・九八

門注得意鈔

五.〇•〇

五八·八

妙一尼御返事富木殿御返事

大田殿許御書

0.0

三 五

りながら、文脈依存型文の比率が低いからである。 に文脈依存型文が多い理由にならない。真蹟が残っている「御輿振御書」・「妙一尼御返事」は、共に短い消息であ 御書の中に文脈依存型文の比率が高いものがあることは留意しなければなるまい。短い消息であることは、たただち 大過ないのではあるまいか。とすれば、「與宿屋入道書」「與多寶寺書」「與長樂寺書」は短い消息とはいえ、 「門注得意鈔」「富木殿御返事」の二書は五○%を越えているが、漢文の場合でも文脈依存型文の文は少ないと見て 十一通

三、名詞の比率

殿御返事」五九%、「新尼御前御返事」五九・五%で、「日蓮の文章には一般的に名詞が多いと認定できる」と述べて おられる。古瀬氏も、名詞比率を調査し、「大田殿女房御返事」五九・九%、「転重軽受法門」五一・六%、「御衣並おられる。古瀬氏も、名詞比率を調査し、「大田殿女房御返事」五九・九%、「転重軽受法門」五一・六%、「御衣並 比べて高率であることを指摘されている。消息についても、「土篭御書」五四%、「富木尼御前御書」五七%、「王日

『開目抄』の品詞の比率を検討された片岡氏は、名詞が六五・二%にのぼり、親鸞の『唯信抄文意』四八・九%に

七 (76

八 175

ている。そして、名詞比率の高さは、やはり日蓮遺文の特徴の一つであると述べておられる。つぎに十一通御書の名(ほき) 単衣御書」六二・八%、「法衣書」五七・四%であり、『開目抄』を加えた名詞比率の平均が五九・三八%と指摘され

與北條時宗書 作品 五八・〇

詞比率だが、次のような結果がでた。

名詞比率 %

與平左衞門尉賴綱書 與宿屋入道書 四四·六 五七·五

與建長寺道隆書 與北條彌源太書 五六・〇 七二・二

與極楽寺良觀書 五九·四

與大仏殿別當書 四三・三 五九・二

四六·一 五三・二

與浄光明寺書 與壽福寺書

與多寶寺書

與長樂寺書 平均

五五.五

四〇・七

書」「與大仏殿別當書」「與多寶寺書」「與長樂寺書」が問題になるであろう。このデータをどのように評価するか。 大体六○%前後というところが平均的なところであるので、他よりも低い四○%台の比率を示している「與宿屋入道

ここでも真蹟の残る六種の消息との比較が必要であろう。六種の消息の名詞比率は次のようになる。

作品 名詞比率 %

五九·五 六二・六

御輿振御書 安国論御勘由来

門注得意鈔 富木殿御返事 五七·一 六二・八

大田殿許御書 妙一尼御返事 六四·一 六九・二

平均

六四・

殿別當書」「與多寶寺書」「與長樂寺書」の名詞比率の低さは際だっている。日蓮聖人の文体的特徴とは異質なものと 名詞比率のデータも、基本的には和文の場合と同じような結果となった。そうしてみると、「與宿屋入道書」「與大仏

して、 やはり注目せざるを得ないであろう。ただ、これだけで偽作であると断ずることができないのは、 自明のこと

九 174

173

人の文章を上手に模していると評価することはできようか。 文章に比べ、文脈依存型文の比率がかなり高いものがあること、名詞比率が極端に低いものがあることなど偽作の可 以上、片岡了氏・古瀬順一氏の御研究に導かれつつ、十一通御書の文体が日蓮聖人のそれとして相応しいものである 他の漢文体遺文のそれと比較検討することが残された課題である。もし、十一通御書が偽作であるとしても、 能性を考えざるをえない点が見いだされることもまた事実である。助辞を含めた語彙や多用される言い回しなどを、 か否か、検討を加えてきた。その結果、決定的な齟齬を見いだすことはできなかったのである。ただし、日蓮聖人の 日蓮聖

註

(1)村上征勝氏、伊藤瑞叡氏、古瀬順一氏、春日正三氏、藤本熙氏、岸野洋久氏による共同研究「日蓮の三大秘法禀承事の真偽 する△」とが掲載されている。また、漢文体については、田中喜久三氏『立正安国論文体の研究』(昭和十七年刊)がある。 ている。例えば、『大崎学報』第一四八号には、冠賢一氏「文部省統計数理研究所の「三大秘法禀承事」真作説に対する疑義」 判定」(文部省統計数理研究所)が、その白眉であろう。この研究には、文献学・書誌学的立場からの批判もあり、論争が続い 伊藤瑞叡氏「三大秘法禀承事の計量文献学的新研究−クラスタ−分析による真偽判定▽本研究に対する批判疑義をも消通

(2)片岡了氏「日蓮上人の文体-開目抄と消息から-」(『仏教文学研究』第六集・昭和四三年六月)。古瀬順一氏「日蓮遺文の

文体-計量分析を通して-」(『統計数理』第三六巻第一号・一九八八年)。

(3)『昭和定本 日蓮聖人遣文』第一巻を用いた。訓点の付し方に、統一性を欠くのではないかと思われる点もあるが、注記した 部の例外を除き、そのまま訓読した。また、訓読にあたっては、小林是恭氏『日蓮聖人遺文全集講義』を参考にした。

(4)古瀬氏の示されたデータは次のようなものである。

四条金吾殿御返事 こら入道殿御返事 太田殿女房御返事 御衣並単衣御書 転重軽受法門 檀越某御返事 土木殿御返事 文構造 単文 五三 七七七 五〇 文の種類の割合 五五 十五 十八 % 十八〇 複文

(5)「法華経云〜」 などと書かれた引用文及び、「 恐恐謹言」 等の結語の部分を除いた。また、法華経など経典の引用の中で、音 こときものである。 ば、「與建長寺道隆書」・「〜大佛殿ノ長老等ハ我慢心充満未得謂爲得ノ増上慢ノ大悪人ナリ」の「我慢心充満未得謂爲得」の 読され、連体修飾語となっていたり成句としてして機能したりしているものは、ひとまとまりの語として扱っている。たとえ

(6)ここでも、引用文・及び結語を除いた。原則として、昭和定本の訓点に従っている。ただ、「安国論御勘由来」では、「或御 時捧宣明。或御時以非處理等云云。」を一文とし、「定給敕宣・御教書祈請此凶悪歟 佛神彌作嗔恚~者也」の文を「~歟」で切 って二文ととった。また、「後號傳教大師」の注記も除いた。

(7) 古瀬氏の示されたデータは、次のようなものである。

作品 主語が現われない文の割合 文脈依存型文(%)

転重軽受法門

法衣書 御衣並単衣御書 一八・八 四・三

太田殿女房御返事 | | · | |

一九・二

(8) 注2参照。

編集後記

る光の源となることを念じております。

★例年より少し厚めの「東京立正女子短 大学紀要」第二十一号をお届け出来る 変員の一人としてホッと安堵しておりま でいらっしゃるY委員の陣頭指揮のもと、 でいらっしゃるY委員の車頭指揮のもと、 でいらっしゃるY委員の車頭指揮のもと、 の間、 御場作業を進めてきましたが、その間、 はります。発行に至るまで、編集のヴェテラン でいらっしゃるY表しておりましたが、その間、 はりますという。

今回、ほぼ全員に近い専任教員の先生 今回、ほぼ全員に近い専任教員の先生 た。ここに、心よりお礼を申し上げます。 たなっている現在、先生方がその責務を になっている現在、先生方がその責務を と思います。また、寄せられました原 など製います。また、寄せられました原 ると思います。また、寄せられました原 がァラエティの豊かさは、本学自体の特 がっフエティの豊かさは、本学自体の特 がっって提示された論点が、それぞれ の一つとも言えると思われます。各論 は、な様な分野にわたっており、その がっっエティの豊かさは、本学自体の特 がっっとであれます。各論 は、本学自体の特 がっっとができました。

さて私事、着任以来二年になり、本大さて私事、着任以来二年になり、本大学校歌も馴染んできたところですが、この編集後記がほぼ最後の本学での仕事とはない、新しい出発だという思いを新たにしております。在任中、ご指導ご鞭撻にしております。在任中、ご指導ご鞭撻にしております。在任中、ご指導ご鞭撻にしております。在任中、ご指導ご鞭撻にしております。在任中、ご指導でを割いたしまから、「おり」を表している。

にかと忙殺続きであった。 改新に向けての討議等で、 れば、学生指導に加えて、 状況ではなかったからだ。 L けつつも、随分乱暴に原稿の取り立てを 足を促したのではないかと密かに気にか 詫びしなければならないだろう。睡眠不 員の一人として、まずは著者の方々にお 厚いものとして完成した。だが、紀要委 ★本号はご覧のとおり、二○○頁程の分 続けたのであるから。 というのも、この一年は研究どころの 専任教員はな カリキュラム 振り返ってみ 目まぐるしく

なんとか一年がたったというのが本音である。どの大学もほぼ同じような状況にあるのではないかと推察される。しかし専任教員によるこの全八編の精力的な研専任教員によるこの全八編の精力的な研事任教員によるこの全八編の精力的な研事任教員によるこの全八編の精力的な研事任教員によるこの全八編の精力的な研事任教員によるこの全八編の特力的な研事を整ちまえたもの、データー分析を踏またたもの、理論分野のもの等々、いずれまでは、大いとの教意と感謝の意を表したい。

がったろうと思われる。新米編集員の熱心な編集へ取り組みがなければ、本号は完成しなかったろうと思われる。新とい大学である月で本学を去られた。新しい大学での活躍を祈りたい。最後に、本号は図解を対したい。最後に、本号は図様のは、本号は図様のは、本号は図様のは、本号は図様のは、本号は図様のは、本号は図様のは、本号は図様のは、本号は図様のは、本号は図様のは、本名はの言葉としたい。 (N)

隆が小説にしたてた「文学部唯野教授 けだろう。幸か不幸か、本学には筒井康 キュラム改正もいたずらに空洞化するだ 究活動は、決して容易ではない。だが、 に言うが、本学のように小規模な短大で 見直しが進められているところである。 教育をめざして、現在、カリキュラムの を重ねてきており、さらにキメの細かい 本学も学長のかかげる、より充実した 育のあり方が改めて問いなおされている の時代が現実となりつつある今、 ★十八歳人口の急減期を迎えて、大学冬 むしろ危機意識が尖鋭化している。しか を現実に輩出させらるような余裕はない。 いることも事実である。そのなかでの研 門領域での研究活動なくしては、カリ 教育と研究」をめぐって、真剣な議論 危機意識はときに生産性を高める。 教員ひとりひとりに多大の負担を強 かし、「キメの細かい教育」と一口 大学教 が、文体の数理統計的な析出を行なって の議論を歴史的に検証し、かつ国文学者 歴史学者が、「御書」をめぐるこれまで 建学精神の祖である日蓮聖人の、 地平である。 界』を著わした民俗学者が耕す新たなる 社会の構造を浮き彫りにする穿った視点 の介入、それと現世利益を分ち合う農耕 いる。地蔵信仰が流布する過程に、 定着していく社会的土壌を堀り起こして 地蔵の変身譚が、次第に民間信仰として 推理が展開するのか、次号に期待しよう。 いる。この厳密な考証の上にどのような 考察である。すでに聖人の『遺文』や 通御書」は真か偽か、をめぐる刺激的 『立正安国論』の英訳を世に出している 膨大な調査研究を基に短大生の健康を 注目したい。『キリシタンの神話的世 「地蔵の田仕事再考」の紙谷論文は、 西脇(以下敬称略)論文は、

> 女子の意識変遷を伝えて、女子教育の 析」を行なっている山室論文は、青年期 英米語に関しては、語学として三 性を改めて気付かせてくれる

7

本学 ts

と結語のさまざまな事例に言及している ラムの一環として書かれている井口論文 に負うた。記して感謝する。 ては、その多くを「委員、 作家、ベケットの言葉の不可能性につい なっており、 ついて日・英語の詳細な比較研究をおこ 中岡論文は、鼻音の発音の微妙な相違に は、挨拶の文句、 ス・イングリッシュの体系的指導プログ 文学として一篇が収められている。 て論じている。なお、本号編集にあたっ 文はポスト・モダンの先駆ともいえる劇 の深層構造「支配拘束理論」を援用し 移を明らかにしている。また、 日本語の隠された構造が与える格の イリンガル秘書教育におけるビズネ 伊原論文は、チョムスキー 演説や手紙の書き出 N委員の尽力

仏教

をめぐって貴重な提言がなされている。 された文明社会に生きる人間の自己管理 科学している杉江論文は、 実証心理学から一性役割受容度の分 高度に機械化

諸論考の領域は、 ぎりである。 られた。一編集子としては、

うれしいか

ここに収めることのできた 実に多岐に渡っている。

号にも、積極的に八篇の論考が寄せ

論文執筆者紹介

教 授 井口美登利 …… 本 学 堀 教通……本 学 教 授 教 授 紙 谷 威 廣 …… 本 学 助 教 授 山 田 田津子 …… 本 学 助 教 授 杉江 つま……本 学 助 山室 宮子 ……本 学 講 師 中岡 典子……本 学 講 師 西脇 哲夫 …… 本 学 講 師 伊原 睦子……本 学 講 師 原 田 寿 子 …… 立正大学短期大学部教 授 大塚 貴子……立正大学短期大学部非常勤講師

本紀要編集委員

伊原 睦子 & 中岡 典子 & 山田田津子

東京立正女子短期大学紀要 第21号

平成5年3月20日 印刷 平成5年3月31日 発行

編 集 東京立正女子短期大学紀要編集委員会 印刷所 株式会社 三 協 社 〒164 東京都中野区中央4-8-9 TEL 03 (3383) 7 2 8 1 (代)

発行所 東京立正女子短期大学 〒166 東京都杉並区堀/内2-41-15 TEL 03 (3313) 5 1 0 1 ~ 3

THE JOURNAL OF TOKYO RISSHO JUNIOR COLLEGE FOR WOMEN

No. 21

March 1993

CONTENTS

Comparative Study in the Usage of "Salutation" and "Complimentary Close" for Letter Writing — Modern English and Old Japanese	1
A Comparative Study of the Pronunciation of Nasals in English and Japanese: Difference in Using Breath NAKAOKA, Noriko	
On Case-Marking IHARA, Mutsuko	47
A Research on the Health Awareness, the Diet, and the Physical Exercise in Their Daily Lives of Junior College Female Students	57
An Analysis of Sex-Role Structure in Adolescent Girls III	.09
The Poetics of Between — Samuel Beckett's The Unnamable	41
The Metamorphoses of Jizo into a Boy Who Helps Farming in Rice-fields	70
The "Eleven Letters" of St. Nichiren ····· HORI, Kyotsu & NISHIWAKI, Tetsuo 1	92

TOKYO JAPAN

Published by
Tokyo Rissho Junior College For Women